
E n d R o l l とコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End_R011とコンティニュー

【著者名】

タナカ

N4559Z

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというキャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きるときに大きな間違いか罪を犯したようです。一いちばん身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだから罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

氣付いたら草原にいました（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもつてゐるわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囲まれた花畠に来ていました。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数える。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだっけ？いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやつてこの夢から覚めることが、だ。はい夢！はいこれ夢！むしろ夢じやなきや困る。歩いてバスが突っ込んで爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚める。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくつと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？なんで俺声かけられてんの？はは、まさかこれ神様ついていやつ？ははは、まっさかー？

おわるおわる振り返る。そこには軽そうなホスト風の男。シリバーアクセサリーを首やら手にじゅうじゅう巻いている。全体的にキャラ男にしか見えない。

よかつた、お約束みたいな展開じやなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言つてんですかんなわけないですよ。こんな俺の夢に過ぎないんですから。そうそう、夢じやなきやいけないんですから」

「現実逃避も甚だしいよー？ はつきりと事故の瞬間覚えてるんだから諦めな？ 人生諦めが肝心って言つじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりやいいんだあああつ…………」

「まあドンマーリ」

「うひぜえええええええつ…………」

きらり、と白い歯を見せてくれる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かつた。

「美少女の神様は今別件で仕事中なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ……、あれ？ なんで今考えてる」とわかつたんですか？」

「そりゃあ神様だもの」

「……だからこれはゆ」

「夢じやないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思つてる？」

シビアなことを言されました。笑顔で、俺にとつて全力的に絶望的なことを言されました。

「……本当に？」

「本当に？」

「まじで？」

「まじで」

「……現実」

「まあ現実だね」

「……俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく」

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白昼夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買いた物をしようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかというと、理由は簡単。母親がいないためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残つたのは自分だけ。初めは姉がやつていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているので、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をして

いて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れしていく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かつて突つ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかつた。テレビのスイッチを切るよつに、俺の意識は途切れた。

回想終了。

「……」
「どう?」
「現実か」
「うん」
「……今日の夕食どうじよ?..」
「混乱してゐね」

親父達は飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だらうけど材料あつたつけ? 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういうば牛乳がなかつた。姉貴は朝いつも飲むから買ってないと殴られるんだよな、失敗した。豚肉とほうれん草はあつたと思うから、豚肉のほうれん草和えが出来るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来てほしい。

「…そもそも君もつ死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの? …俺としては早く説明に移りたいんだけどなー…、

これからのこととか

「これからって…、俺に『これから』はないでしょ？」「そういうわけでもないんだよねー…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？困った顔をしている自称神。どういうことだ？と俺が問うよついじつと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかつたんだ」

どうしてだかわかる？と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろうね、と神は眉をハの字にして笑った。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償われていくものなのだけど…、君は途中で死んでしまった」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。待つて、待つてくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言つ。俺はいたつてクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなければ学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつちつち、そういうわけでもないんだよねー…。大罪こそが人の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかつたの

に、なんの因果か命を落としてしまった。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじゃん。悪いことした覚えもないのに…、どういふことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのや」

「……は？」

間抜けな声一回目。

一瞬耳を疑つた。何言つてんだこの人。転生つて…転じて生まれる？　はい？　ホワツツ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまったからね、違う世界で新たに生きていくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしからないことがあつたら教えにいける。なんてつたつて俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんすけど。ちょっと待て…、転生つて…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふつ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さつきも言つたように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きていらつちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまった…」

「あ、待てよ…？　もし、俺にそんな間違い？とかがあつたとして、こつやつて転生する必要があるんだ？　そこまでして、償つ？…なんで？　俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「そうさ、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさ

え出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある

そこまで真面目な顔で言つてから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑つて俺を見た。しゃらしゃらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいさ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出される」と。新たな人生をエンジョイしようか！ みたいな感じでさ？」「…かつるいな…」

「重くても困るっしょ？ まあ転生先なんだけね…、ねえ君、ファンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「…は？ そりゃあ冒険者とかモンスターとか…」「うん、つまりそこに行くの」

「……………は？」

「さつてねー…それと…」

「待て。おい待て。すごく待て。はい？ どうにつけど？ 今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」「は…はい！？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにならんと読み書き完備だよ？ まあゆっくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！ え、俺そんなファンタジーなとこ行くの決定？ まじで？」

「まじでー」

「かつるー？ 僕のこれから先の人生すげーかつるい調子で言われたー？」

「いや、じつじつのはノリで突っ走っちゃった方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええっ！？」

こいつ恐らくすげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがつた！？本当に神様かこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…？」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思つたら大間違
いだからね？」

「どちくしょうが！！」

「そうだよな！ そんなご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！」

「君の目的は自分の中に氣付くことだからね…、もし氣付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか
…なんだよそれ」

「そもそも世界と言うのは別次元のよつなものだからね。早い話三
次元と二次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が一次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もつ説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていこうと逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかむ、君もともとスペック割と高くない？ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強くて、勉強はそこまで出来るわけじゃがないけど頭の回転は速いし。本当にア充爆発しろとか思われるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか

…」

「…」

「…そういうわけでもない？俺は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？そもそも世界 자체が違うんだよ？星が違うとかそんなじやなく、そもそも次元が違つ。つまりさ、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまつたく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合つ。そうぞ、類にとっての異世界なのだからね」

「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「…」

「…どうしたの？せつきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言つてるけど、結局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「…」

「…どうしようがあああああああ…」

自称神が言つには、言語能力と魔力核だけはあちらと同一のものとする、らしかつた。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方

はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということでの魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしないし、普通の人と同じようになるかもしない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知らねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾にをつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけだ。

「まあ、そりそろお話も終了かな？　さて、君を違う世界へと転生させれるよ。…あ、面倒くさいから」のままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そつそつ転生していく人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなつていいく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなつていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと気が付いた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつん、とリモコンでテレビの電源が切れたよつこ、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、父さんも姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろつ』、と。

：守れてねえじやん。俺死んじやつたじやん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するよつになつた。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を田指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出よつと思つていた。

「父さん」は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあつた。けれどそのたびに体が強化されていつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度も迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。どこのフラグメーカーだ。まあ、父さんは母親一筋だつたらしきけど…、って話逸れた。

つまりそんな父さんの様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。父さんみたく、家族を守れるように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやつた。…最近はむしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに父さんを見習って、少なくとも変な輩から大事な人を守れるように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れたけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入っていた。ここだつたら運動も出来るし、走ることだけしてればいいしそこまでお金もかからないと思つたからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなくて走つてただけなのになぜだ！？ ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言つていた高スペックといつのは、全て家族のために頑張つたものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありますか？ 今頃父さんと姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていつてしまつたし、もう守れない。そう思うたびに泣きそうになつた。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなのだ。父さん、姉ちゃん、死んじゃつてごめん。

自称神が言つていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だつてそうだろ？ こなんいつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、父さん達の元へと生まれることは出来ないと思つけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあつたのだ。

死んだ母親のぬくもり。父さん達の笑顔。友人達との騒ぎ声。

今考えると、それはとても大事なものだつたのだ。早く、早く帰り

たい。

帰りたいんだ、俺は。

「…………ん？」

目を開けたらそこは、先ほどまでいた草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。

ざわざわと、普段は聞きなれない森のざざめき。空気も澄んでいて、息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだつた。

ビバ・異世界。

はいはい俺落ち着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ち着け落ち着け落ち着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸つて、吐いて、吸つて…、ほら、気分が落ち着いてきただろ？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…、

! ! ! ! !

……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通の感覚ならこうなつてもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱり現実…？」

試しに頬を抓つてみた。痛かつた。現実であり夢じゃない。自称神に言われてたことだつたが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。

…まじでか。

うわあああ…と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのときこ、ふと、もぞり、と動くものがあることに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

…え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言つていた。でも、いきなり？ 俺倒せると思えないんだけど？

ぎざぎざ…と油の差してないロボットのように振り替えると、そこには白い着物のようなもの見えた。

「は…？ 人…？」

氣を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えばいいのか？ つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。

その瞬間、自称神の言つていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、下のほうで縛られていた。

「日本人、なのか？　この衣装は和風っぽいんだけど……。」

そう考えていると、その狩衣を纏つた人間の瞳が、開いた。

「ほんにちは」

「…………？」状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？」こうこう場合は

「…………」考え中。

「お前もあの自称神に会った？　あのキャラそういうの

「…………？」混乱中。

「ところどころ異世界なのかな……、見たところお前も転生してきた人間だよな？」

「…………」思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすつか…お前戦える？」

「…………！」思い出した。

「…………？」

「ほんに本当に異世界!!!!？」

「あ、やっぱりお前俺と同じか」　平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうときも「いいユカ大事。あれ？違う？まあなんでもいいが、似たような人がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘……本当に来たんだ……。これは、喜ぶべき……？　いや、悲しむべきということ……？」

「おいお前なんていうの？　名前

「え、へ、な、名前？　て、ていうか何でそんな落ち着いてられるの…」

「いやわしき散々驚いたけど…」

そりやあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。見た目ではあまり見分けがつかなかつたがどうやらこいつは男らしい。瞳は俺と同じく黒色だつた。なんだ、普通に日本人っぽい顔立ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？　俺はそんな名前じゃないよ、忌月、それが俺の名

「…日本人じゃない…？　苗字は？」

「苗字？　そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶^{かや}の国、列峰領^{れつぽうりょう}の治める…」

「もういい理解した」

「いらっしゃも違つファンタジーなのか。

田 覚めたらやはり異世界（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出会いました

「…それで、これからどうぞ」

忌刃と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてからじどりやら同い年だったということがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のこと話を話し合おうと口を開いた。

「あのキャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちや、ちやらお？」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様？ 神様は女だったよ？ しかも綺麗な人だった

…なんですか…？」

「ま、まじで！？」

「え、食いついてくんの！？ あ…ああ、なんか『別にあなたのた
めなんかじゃないんだからね…』って言われた」

つ、つつつつつつつつシンドレ…だと…！！！ 俺のところはあの
自称神とかいうキャラ男だったのに！？ 理不尽だ！

…あれ？ でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか
…。…まさか…。

「お前が！ お前方が！ お前方に行つてたからこっちに来な
かつたのか！ 謝れ！ 全身全靈をかけて謝れ！」
「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒つてんの…？」
「ちくしょう…！ 僕だって美少女の方が良かつたさ…！ あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよとか言われて腹立たないとかおかしいだろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気に入らなかつたわけだ…、つて俺に八つ当たりすんな…」「しなくちゃこの荒ぶる気持ちが抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実験のときに女子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだして、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃね？ と褒められて、女子には先ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。これでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もつと女子と…」「しつ…」

さらばいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。はあ！？ と思わずその手をとろつとしたが、どうにも忌月の様子がおかしかつた。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だつた。イコールそれは周りに響くというわけで。しかも、この世界は、ファンタジー。言つてみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……っ！」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すなんてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がつていぐ。

ちくしょう、気付くべきだつた。ここは異世界。ここルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだから。…言い訳になるな、これ。

がさがせとこちらへ近づいてくる音がする。それは確實にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えている。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見るど、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄つて来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファンタジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち＆身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない幼女？ は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしがそうこうとに偏見など持たん、邪魔して悪かつたのぉ…」

…ん？

ちょっと待て、俺達の今の体制を確認してみよ。

俺 先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌用の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌用 茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちひがああああ う…！ 俺はそんなアブノーマルな趣味持つてません！ 違います！ 本当に違います！」

「は、え？ あ、あぶのーまる？ なんだそれ？」

「…なに？ おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは…？」

「そんなことあるか…！ 俺は女の子… 女の子が好きなんです！」

「そう呼ばれても困るのじやが…」

「『めん俺理解できてない。誰か説明して』

そつぱりわかつてない忌用は置いといて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわからんないし、ここひくんに家つてないか？」

「わからなー…？ …ひひひ… おぬしら、わしことわかつておるか？」

「ん？ なにが？」

「わしこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゅざー…」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ…」

「あ？」

「握手を…」

「……」

あれ？ 僕なに言つてんだ？
なに言つちやつてんだ！？

なに言つちやつてくれぢやつてんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女つ娘とか考えてないです
！ 違います！ 萌えとかそんなのと違いますからー。」

「違うのか？」

ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がりがつてるとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればこじれり
か教えてほしいんだけど…」

「お嬢さんではない…。ん？ なにやらおぬし、ぽっかり抜けた

ような力があるな」

「え、わかります？」

「…なんの話だ？」

話に入ってきた忌用を見たウエイブは、なにやら変なことを囁く。
それをせらつと受け止め、むしろ理解してゐるような口調だ。
訝しげに見ていたのに気が付いたのか、忌用が慌てて俺に教えるよう
に言った。

「俺、死ぬ前は靈媒師だったんだよ」

……なんですか？

魔女と出会いました（後書き）

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

回じ転生者は靈媒師

「れ、靈媒師？ 精霊師つて…、あの、靈とかなんやら祓いやつ…？」

「ううだけど…君の世界にはないの？ 俺のいたところじゃ、一般的な職業だつたんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い！？」

「あ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思つても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないので。

それに忌月だつて俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまつたくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じやないと。

それにはどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているよつに見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おつと話がずれた。

「まあ、そういう『靈力』つてのが俺にはあったんだけど、この世界に来るときにはすっぽり抜けたつてわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしじうがないとは思つたんだけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどうちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとつて異質なものはない

ほつがいこだぬい。皿立してもしょうがな」

「違う世界、…？ やせつおぬしうるの世界のものでないのか？」

「え」

「え」

「…なんじやその反応は」

いやいや世間話のように言われましたよウロイブわざ。俺と月は顔を見合わせる。

「…わかるもんなの？ ルーニーの」

「普通の人間にさわからんじゃろ。時間がたてばおぬしうるの世界に染まるじやうが、いかにも臭いが違つ」

「こ、臭い？」

「昔にもやうこいつものがおつたからのお…、150年くらこ前じやうつか…」

「ひや、ひやベージュのねんりー？ 前こへつだよー」

「ん？ 今年で324歳になるの」

「へへつー？」

なんていつたい。300歳越え…だと…？ 確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？ まじか？ まじですか？

ちなみに呪豆は、「だからそんなに口調なのかな…」とかなんやう言つている。突つ込みビリがずれてるや。

「まあかなり珍しいことに違いないからな。特にその黒い皿はあまり見かけん」

「やっぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりこど…？」

「そりじゃな。まあかといつて珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？…立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家に

でも来ぬか？この世界のことを教えてやる」

「本当！助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前力タ力ナつぽい言葉苦手だよな」

「かたかな…？な、慣れるから！そのうち慣れるから！」

忌用と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはある自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違つたり、容量が違つたり、属性が違つたり…、ちなみに属性と言るのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合った属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合つた、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず毎日尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食つてたわけだし…、君のところじゃそういうのなかつたんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかつたのか！？」

「な、なんていきなり怒るんだよ！」

「うるさいの…、静かにしどらんとモンスターが襲つてくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけれど、

どうも年が食い違つてるように見える。

なんとなくそう思つてるとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通

魔女の家、といつて、少々身構えていたのだが、そこはビリにもイメージと違つて小奇麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあつたのだが、壺は中身は入つておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だつた。けれどきちんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のよつな。ウェイブが普段使つているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こちちじや、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだった。いや、日本と比べてはどうしたことなく昔の外国？ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座つて待つておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こうちや…？　お茶、だよね？」

「なに言つてんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやつて座るの？　畳とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるよつだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たよつなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

畠と言つたけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろつか…、服装だつてやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書でしか見たことがないんだけれども。

「ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に置だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名稱は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そういうえば聞いてなかつたけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなつて」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじやないよ！　え、えんぢ…？　だつけ？そつちはどづしたの？」

「Hンドリってなんだよ俺終了しちゃつてるじやねえか」「

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかつたかもしれない。

「俺はトラックが突つ込んでそのまま爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりや…」

「食い違つてる気がするけど気にしないでおこう」

カタカラナはそのまま伝わつているわけか…、なんか言語能力があつちよりこっちのが高性能…？

『それは俺が有能だからだよ』

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確實に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝つてつて言つたら手伝つてあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なこと言つてんのよ! ベ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あんたの方が、仮に性能が良かつたとしても、その、違くて…で、出来なかつたわけじゃなかつたんだからあ!』

『うんわかってるよお、だからほら、泣かないで』

『な、泣いてないわよ! カ、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどびうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だつたみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言つておぐが俺はエンドじやねえ。終了してねえか

『』

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言つてるから結局エンドになつちやつてるじやねえか!…」

人生終了して名前も終了つてか! 不吉じやねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらでも聞けい、ほひ

「…サンキュー」

「…この取つ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言つたがじや。それでここは深海の森。」の近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらはギルドに登録するがよい

「あらんど…？」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」「わかるのか…？」まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじや。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じやな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるというのが一般的じや。簡単なものからそりやあ難しいものまで山ほどある。そのどつちともに料金はもらえるから。生活には持つて来いじや」「仕事って、どんなのがあるんだ？」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじや、料理人募集のようなものもあるのう」

「料理！　まじか！」

「そ、そんなキラキラした田で食いつくといつかの…？」

料理なら持つて来いだ！　試行錯誤を繰り返し作り上げた究極の味噌汁からフグの調理（こつそり獣師さんにもらつた本体丸々）を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度も就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人さえ感激させた。俺ははつきり言える。料理の腕だけはチート級だ。まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じや。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんのう」

「え、そういうのわかるのか？」

「わしは魔女じやぞ？　そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと詰うか… もともと呑った『なにか』のせいか魔力の質が特異じやな。それにぽつかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのものを望めるぞ？」

…なのに貧弱じや。限りなく体力がないえ力もない。走つただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？ 人の気にしてるところ突いちゃった感じじやなく抉つちやつた感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まつておる」

「え、そんなヘビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。… それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきてある。総合すると、まあぶつちやけ あんま平和じやない的な？ … ということじや」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやつておられん。まつたく人間というものはどうじようもないものじや。今も魔物は増えてきておるといつのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亞人やら獸人やらしきぢやか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん… 戦争が始まったのは百年ほど前、魔物は増え始めたのは百五

十年ほど前じやの「

「数年じゃねえ…」

「戦争なんて下らん」としとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組め

ばいいと思ひのじや、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「セリヤあ当人達にとづけやくだらないもんじやないからなんだろ
うよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんな
が掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからわ」

そんなことをなんともなしに語つたら隣に座つてゐるこいつの間にか
生氣を取り戻した彌月が目をぱぱぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「くえ、それは素晴らしいケメンなんだろ?」

「いけめん? …麵?」

やっぱこいつの言動面白くなつてきた。

魔女の家は案外普通（後書き）

地名やらなんやらほんとクラシック曲から使わせてもらったりしています。

アストゥリアス

アストゥリアス（伝説曲）（西語：Asturias（*Leyenda*））は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、『旅の想い出』作品7-1の第1曲、前奏曲「伝説」（西語：*Leyenda*）として書かれた曲である。

イベリア

イベリア、12の新しい印象（フランス語：12 nouvelles Impressions ? en quatorze cahiers）は、イサーク・アルベニス最後年のピアノ曲。

Wikpediaより。

修行しました

それから、ウエイブからたくさんこの世界の常識を知った。

まずは暦。春の月、夏の月、秋の月、冬の月の四つがあり、一月は90日ある。春の月1日、と数えるらしい。地球では12ヶ月で一年だったから、それを聞いて思わず眉を顰めたが、一月が90日だということは30日分が三つ……、ということを考えればまあいいともう。合計で360日だし、そう思えば割と近い。

それからモンスター。予想通りゴブリンとかオークとか有名どころがうじやうじやといふ。俺の聞いたことのないモンスターの名前もあつたがそれもやはり異世界。異世界だとしても世界は世界なのだ。知らないことがあつたって仕方がない。

「おぬしらがよければいいんじゃが、しばらくここで修行せんかの？」

「へ、どうしたいきなり」

「いや、まだこの世界に来たてであまり力の使い勝手がわからぬじやろ？ 都合のいいことにおぬしらにはおぬしらなりの知識が豊富にあるようじやし、案外強い魔術師になれるやもしれん」

「え、俺ら、魔法なんて使つたことないんだぞ？ なのに大丈夫なのか？」

「それに強い人つて小さい頃から鍛えてるもんじゃ……」

「いいや、そんのは考え方一つ、戦い方一つでどうとでもなるわ。魔力が少ない人なら少ない人鳴りの戦い方があるように、誰しも得意不得意があるように、確かに経験がないのは厳しいが、おぬしらにはおぬしらのことは一風変わった考え方、想像力があるじゃろ

う？ それにわしが鍛えてやると黙つておるんじや。 いたずらに大魔女と呼ばれておるわけじやない

「…まあ俺にとっちゃ願つてもない誘いだけど…、いいのか？」

「構わん。近頃は退屈しておったしの。それにおぬしらは…面白そうじや」

「？ どういう意味だよ」

「そういう意味じや。よし、まずはだいたいのモンスターの知識を詰め込まんとの…」

「え、俺勉強嫌い」

「俺も？」

「おぬしは体力づくりじや。せめて一般人には追いつけ。おぬしは記憶力がよさそうじやから本さえ渡しつければいいじやる。魔物払いの結界をしておくからまずは十周ほど走つてこい」

「……俺に死ねと？」

「どんだけ体力無いんだよお前」

つまりそんなこんなで、大魔女さん、ウェイプとの修行が始まった。先ほど台詞の中に登場したが、俺は勉強が嫌いだ。自称神には頭の回転が速いなどと褒められたが、勉強は本当に苦手だった。成績は下から数えた方が断然速い。情けないことだけれど、つまり、そういうことだ。…馬鹿なんです。すいません。

一方の忌月は、確かにウェイプの言つた通り本を貰い、ただ読んでいるだけで簡単に覚えていた。だけど体力がおかしい。なんで十メートル走つただけで息切れするほど疲れるんだ。そのうえ顔も青くなるし今にも倒れそうだし、正直ここまでとは思わなかつた。

十日間はお互に苦手分野のことに徹し、ひたすら努力をした。さすがに俺だってサボつていられないことはわかっている。下手したら死ぬのだ。そういう危険が常に纏わりついている。

ギルドに登録せずに働くことはダメなのか、と聞いたことがある。

身分証明書はすっぱり諦めて。そうしたらい、『どこから来たものか
さっぱりわからぬ奴をそつそつ雇えると思つか?』などと返された。
確かに俺達にはもう家族いない。いや、生きているのだけれどこの
世界には存在していないのだ。それに今頼れるのはウェイブただ一
人。だけれどこの魔女が住んでいるのは森の奥深く。しかもなにや
ら『恐れられた存在』らしい。なんだか魔女らしい噂だ。
つまり後ろ盾と言つものが存在しない。いきなりぱつと現れたこん
な怪しい奴を雇ってくれるのは相当人の良い人間らしい。じゃあそ
ういう人を探せば、と言つと、『そんなにおぬしは頼れるか?』
と。無理かも。まあギルドには登録するつもりだったし、一応聞
いてみただけなのだけれども。

十日たつころには、忌月が一般人並みの体力になっていた。それに
俺はすぐ驚いたが、ウェイブがあつさり答える。

「自力じゃもうほぼ無理だつたから、魔法でぎりぎりまでそういう
筋肉などをあげて、それからトレーニングさせたのじやがそれであ
れがもう今出来る全てじやつた」

…通りで落ち込んでるんですね忌月さん。隅で体育座りをしており、
背中には暗雲を背負つてゐる。なんとか忌月を立ち直らせてウェイ
ブから今度は『魔法』について学ぶ。

魔法というのは、前にウェイブが言つたとおりそのまま、イメージ
して鍊つた魔力を詠唱で形作る、という感じだ。本に記されている
ようなものがたくさんあり、オリジナルで創作できたり、魔法と言
うものは無限の可能性を持つてゐる、という話だった。

まあだが、オリジナルで魔法を作るというのは難しく、確固たるイ
メージを持ったうえに魔力も大量に消費するらしい。まあ初めて使
うものだからそういうものだよな。

「…魔法といふものは感情に連動したりする。これは気をつけなければいけない」とじや

ウェイブが真剣な顔立ちで囁く。

「例えば怒りで我を忘れるときがあるじやろ？　あれは酷く危険な状態なんじや。そんな感情から魔力のバランスが崩れ、増幅する。それが放たれれば、相手どころか自分も傷つく。十分用心するんじやぞ？　…まあ人の心はそう無理矢理制御できるもんじやない。じやが、ちゃんとそれは覚えておれ」

それからまた数十日がたつた。

ウェイブの元で身を守れるだけの力と魔力を蓄えた。魔力はどうやら自然に体力が回復すると共に溜まっていくらしい。うまいものを食べても補給される。そんな簡単なものなのか…と半ば呆れたりもしたが。

魔法も使えるようになった。俺はどうやら異常に器用らしく、案外簡単に出来たので俺自身が驚いた。ちなみに忌月は、元いた世界で使っていた力どこか似ているらしく、一いつ切くも簡単に出来た。：そんなんでいいのか？

忌月は魔力？の際に使っていた術を試そうと一人でいろいろやつていた。それを見て俺自身もオリジナルのやつ作ってみよーかな、などと考え、別々に修行していた。

なんとなく、俺は焦つてたのかもしれない。元の世界でまた生まれるため、俺の、『間違い』か『罪』を探す。力をつけた後に、何かがあるんじゃないかと。

そして、俺達は今日、魔女、ウェイブの家から出る。

別れと出合い

「本当に大丈夫か？」
「大丈夫だよ、心配すんな」
「…いつでも来てもいいからな？」
「ありがとう、困つたらまたここに帰つてくるよ」

俺は帰る、といつ言葉に変えてウェイブに告げる。すると、寂しそうなウェイブの顔が少しだけ緩んだ。

今日までの間世話に会つて、最初に出会つたこの世界の人間がウェイブでよかつたと心から思つてゐる。多分忌用も同じ気持ちだらう。こちらも眉を八の字に下げて、少し寂しそうだつた。

「ウエイブさん、本当にありがとうございました」

それでこの忌用、少しの単語なら発音できるようになつていて。どうやら言葉関連は記憶力がいいはずなのに苦手らしく、覚えるのにこづつた。ウェイブの名前はちゃんと言えるようになつてたが、いつの間にか忌用は俺のことを『エンド』と呼ぶようになつていた。…いや俺まだ終わつてねえし。一回終わつたけど転生したし。いくら言つても直らないのでもう諦めたのだけど。

「それじゃあ行くな。本当にありがとう、ウェイブ。今度お土産もつて帰つてくるからな」
「絶対じゃぞ？ 絶対じゃからなー。」
「はーい」
「じゃあ、行つてしまーす！」

俺と忌月は歩き出す。時折振り返りながら進むけれど、ウエイブはずっと、手を振っていた。…本当に、彼女と会えて、すく幸運だつたんだな…としみじみ思う。

森をずっと進み続ければ、やがて木々の量も少なくなってくる。その間に体力のない忌月は何度もバテたりしていたが、とりあえず応援だけして歩かせた。

ウエイブが言っていたのだが、忌月の体力は一般的な女性ほどらしい。それを聞いてさらに泣きそうな顔になり、「一般的は一般的でも、体力の無い部類の一般的じゃ」、とさらに追い討ちをかけられ、本気で落ち込んでいた。なんていうか傷口に塩どころかタバascoかけた感じだあは。可哀想過ぎて俺も若干涙目になつた。元はどれだけ体力がなかつたんだよ。

「ギルドに入つたらどうする？ 俺らでパーティー組むか？」

「え、ぱーてい？ …ぱーていぱーてい…パーティーか。組んでくれる？世界違つて一人じゃ心細いし、あんま異世界人だつてこと喋つたらダメって言われたし…」

「ま、気楽に行こうか。まずは慣れといった方が身のためだし」

「うん、わかった。これから頑張ろうか」

「ああ」

「死なないようにね！」

「…笑顔でそんなこと言ひつな、悲しくなる」

そうだよな、死んでこの世界に来たんだよな…。あの時はトラックがすごい勢いで突っ込んできたから怖いと思う暇もなかつたけれど、今となつては思わず震えてしまう。もうあんなのは勘弁してほしい。

歩いていくうちに木々の生い茂つた森を抜け、大きな平原に出た。そしてその道の先に街が見える。あそこがイベリアか。俺と忌月は

顔を見合せた。

さあ行こう、とまた足を踏み出した。

「あやあああ
…………」

「ホワイ？ 淑女の悲鳴が？」

俺と忌月同時に足を止める。それから恐るべく声の聞こえる方である左方向を向いた。

「や、そこの人たちいー！ た、助けてーー！」

走ってくるのは、長く、ところどころはねた、銀色のウーブした長めの髪を持ち、蒼色の瞳をした白い肌のいわゆる美のつく少女。うん、ここまではいい。

「…ヒンド、あの女の子の後ろからやってくる大量の犬はなんだらうか」

「モンスターだな」

「物の怪^けですよね、あの犬。…確かに、ぶらつく感じとか書いてあつた。人襲うとかも書いてあつた」

「…んで、あれ襲われてる状態だよな？」

「うん」

森出でいきなり戦闘？ どんな強制イベントだよ。正直言つと戦うというのはあまりしたくない、けれど、…助けないって選択肢は初めからない。
どれだけ今の俺達が通用するかもわからないけど、放つてはおけない。

それは忌月だつて同じようだ。

「おー！ 早くひらいて来い！」

一
は、
はい、
はい、
はい、

黒い犬達が女の子をすごい勢いで追いかける。俺はそんな凶暴な犬たちに走る。モンスターに追いかけられる女の子の方に走る。

「き、危険です！ 素手で敵うような相手じゃ……」

「わかつてゐ！ 数があれだけあるの恐えし、まだ俺よく戦い方わかつてねえから戦わない！」

「はい？」どういう意味ですか？

俺は女の子のところまで近づくと、そこからぐん、と加速し、女の腕を取り、また走りだす。

恵由に田線でなんとかするように頼んでみる。すると恵由は露骨に困った顔をしたが、それでも頷いた。

「また東」

「走るのは自身があるんでね！……ああもうどうりでいい……」

十三
卷之二

俺は引っ張つて走るのが面倒くさくなり女の子を抱き上げた。走るのがあまり速くなかったので行つたことだつたのだがこれつてセクハラにならない…よな？ 女の子は真つ赤になつてたけど走りすぎて疲れたのだろうか。そう考えると、走りまわさせたあの犬達に怒りがわいてくる。

「忌月！』

「りょーかい！』

戦つつもりはない。勝てるかどうかわからぬし、数がある量だ。魔法が使えるようになつたからといって、威力もいまいちよくわかつていい。もし逆効果になつたら最悪だ。

だから確実な手段。

「【煙玉】……」

忌月の振上げた手に小さな魔方陣が浮かび、そこに靄がかかつたような球体が出来上がっていく。

前の世界で生きてた頃に使っていたらしい術。……いや今は魔法か。魔力と靈力の使い方が似ていたらしいのでいくつかは出来たと言つていた。その中の一つ。

いくらモンスターだといっても犬型だ。確かブラックドックも、その眼より鼻に依存している。それを利用した術、……じゃなくて魔法。

ちなみに出来たと教えてもらつたときの会話。

『エンドー！ 煙玉が出来たんだ！』

『へーよかつたな……煙でんの？ 消臭効果とかつけれど、部屋

干しは臭いがな……』

『……出来ないこともないけど、なんでエンド洗濯干してるの……？』

あのときの俺グッジョブ。忌月に変な目で見られたけど気にしない。忌月の放つた魔法は俺達とブラックドックの間に落ち、ばふんつという大きな音と共に広がる。

目晦まし用の白い煙がもわあ、と立ち上りブラックドックを覆い隠す。ブラックドックは先ほども述べたように、辺りを把握するため

に眼よりも鼻に依存している。その鼻が使じようもなくなつたら、その動きを止めるようだ。

「忌月！　お前も早く来い！　街の方へ走るぞ！」
「は、走るのっ！？」

忌月が絶望的な声で叫んだが氣にしていられない。俺は女の子を抱えたままイベリアの街に向かつて走った。女の子を落とすといえないので、加速はあまりしない。

忌月の弱々しい声が聞こえたが、氣にせずに走り続けた。

ギルド登録でもました

「あ、あの、ありがとうございましたーーー。」

なんとかブランクドックの群れから逃げて、イベリアの街のその前の道でようやく足を止めることができた。

俺はもともと体力あつたけれど、忌月の様子が誰から見ても可哀想な状態だつたけれど今はスルーしておぐ。

「わ、私はセフィル・トーリックと申します、ーーーのじ恩は一生忘れません！」

「そんなに重くとらなくていいんだけど…」

「いえっ！ それじゃ私の気がすみません！ なにかお礼できればいいんですけど…」

「あー…なら、イベリアの街のギルドまで案内してくんね？ ギルドに登録したいんだわ俺ら」

「そ、それだけでいいんでしょっか…？」

「十分だから気にすんな。おーい忌月ー、そろそろ行くぞー？」

すっかりバテてしまつている忌月に声をかけると、おおー…、と弱々しい声がする。なんとか立ち上がるも、歩くのがふらふらだった。なあお前の体力本当にいくつなんだよ。

「た、体力回復の魔法なら私使えますよ？」

「体力回復？」

「はい、私治癒魔法が得意で…、かといって効果はあまりないんですけど…」

「まあいいや、かけてやつてくれるか？」

「は、はい！」

セフィルはとたとたと彌円の前に行くと、背中に手を当て、円を開じる。微かに魔力がふわり、と浮かび上がった。

「治癒魔法回復系第十三章【休息なれ】」^{レスナ}

緑色の光がセフィルの手から淡く零れ粒子となつて変換される。時にして数秒。セフィルが手を離す頃には彌円の汗も引いていた。

ちなみに魔法の名前の前に言つていた言葉は詠唱ではない。もう少し力をつければそれも短縮できるのだが、あれは本から得た魔法にありがちなことだった。

詠唱ではないが詠唱と似たような効果もあり、違いもいまいちわからない。けれどウェイブがそう言つていたからそうなんだろう。

「あー…ずいぶん楽になつた…、ありがとー、せ、せふいるぞ」と

「？　はい」

「もつと鍛えろよ、さすがに俺も泣けてくるレベルだわ。なんか哀れみ系で」

「エンドー！」

酷いよつ！　と言つてくる彌円の頭をチョップして、なら頑張れ、とだけ言つておく。こいつは優しい奴だし、魔法を使うのも上手かつた。きっと努力もするだらう。

「セフィル、じゃあ行くか？　案内頼んだ」

「わかりました！　ご期待に沿えるよう努力させていただきますー。」

「…そんな真面目腐つた口調やめない？」

とりあえずセフィルを先頭にして、俺達はイベリアの街に入る。そこはすっと昔のヨーロッパのような風景で、思わず目を瞠る。けれどなんとなく思つ。これはまったくの別物なんだなあ、と。しばらく進み続けると市場も見えてきた。美味そうな飯の匂いが鼻をくすぐる、が今は違つ違う、と頭を振つて入れ替える。

「賑やかなんだねー……」

隣で忌月がぼそりと呟いた。

「いいんじゃねえか？ 僕は活氣あるほうが好きだぞっ。」

「まあ楽しそうだよね」

「ふふっ」

そんな当たり障りのない会話を俺達はした。

人々はやはりなんていうかファンタジー。髪の色とか瞳とか。それだけじゃなくまんまと見た目が狼の人とか、猫の人とか、なんかいろいろな人がいて面白い。

なんかいかにも冒険者のように大剣背負つてたり、魔法の際に使うようなごつごつした杖を引つさげてたり、さまざま。柄の悪いような人たちもいたけれど、それはあまり係わり合いにならないでおこう。そういう人もつき物だつてことは理解できるが、進んで交流するほど馬鹿じやない。

「あ、見えてきましたよー。あそこがギルドです」

「へえー…あそこか…」

「私も登録してるんですよ? まあでも、難しいのは無理ですけど

…」

見えたのは大きな建物。入り口の横にはギルドの看板が取り付けられている。

冒険者らしき人たちがそこから出たり入ったりしていて、いかにも、だ。

「じゃあ行くか。セフィル、ありがとな」

「いえ！ お役に立てよかったです！ また必要なときがあったらかけつけますので。ではさようなら、エンドさん、キゲツさん！」

「ああ！ つって俺エンドじゃなっ！」

「じゃーねー」

「……この全ての元凶が！！」

「へ、え、なにがだよ？」

「……もういい！ 行くぞ！」

「あ、うん……」

脇に落ちないという顔をした忌用を引っ張つて、ギルドの中に入る。入り口のすぐ横に受付らしきものが見えたので、そこに直行する。

「あーあの、ギルド登録したいんですけど……」

「はい？ 登録でしゅつ、か？」

「……」

「……」

「……」

「噛みました」

「あー、うん」

真面目そうなうえに無表情で言われた。そしてかなりの美人さんだつた。黒髪を高く結い上げていて、きっちとしたボニーテール。緑色の少しつりあがった瞳に、銀色のフレームの眼鏡をかけていて、鋭利そうな雰囲気が伺える。

ギャップと言つ奴か……？ と思案していたら無表情な顔が怪訝そうに歪められた。

「……登録しないのですか？」
「あー登録しますします！ ほりエンド、早く」
「わかつたわかつた……」
「ではまずここに名前を記入してください。それからギルドの利用規約です、契約書にサインを」
「はいはい……」

言われたとおりに書き進める。

「書き終わりましたか？ それでは用紙をこちり。次はこの水晶に血を一滴垂らしていただけますか？」
「うひ、……まあそういうもんだよな」
「どうしたの？」
「いこや……、お前は平氣そうだな」
「はあ？」

一緒に出されたナイフで指を切りつける。いやはや、自分で自分を傷つけるのに結構勇気はいるだろ……。ちなみに彌助は平然とやってきていた。ちくしょう。
ぼたり、と血が水晶についた瞬間一瞬だけ光り、血の後は跡形もなく消えてくる。

「登録完了しました。あと、これがカードになります」
「はいはい……つて早いんだなー……」
「か、かあど……かあどね。うん」
「……？」
「あー気にしないで。そつこえはお前名前なんていうの？」

「イクシイ・ラメットと申します。他に質問はありませんか？」

「あーないだろ。うん、だいたいはわかるし」

「了解しました」

やはり真面目だ。

依頼と糸田の少年

「…そういえば、貴方たちは一人で依頼などを？」
「ん？ そうだけど？」
「でしたらパーティーとして登録したらどうでしょうか」
「…そのつもりだけ…、登録？」
「ええ、そうしたこちからとしても正直楽ですので」
「…はつきりそんなこと言つんだな…」

無表情でそんなことを言つものだから愛嬌があるのかないのかわからなくなつてくる。美人さんには違いないんだけどさ。

「登録するならパーティー名を決めてください」
「え、名前つけるものなの？」
「そうしないと区別がつかなくなるでしょう。別々に依頼をこなしたとしてもそのパーティーの成果となるのであなた方も都合がいいかと。あとから人を加入させることも可能です」
「うーん、名前か…」

特に俺にはネーミングセンスないし…、忌月になんかいのあるか？ と聞いたらエンドが決めて、と丸投げされた。とりあえず足を踏んどぐ。ふきやつとか悲鳴が聞こえたけど気にしない。
名前…俺達に関係するものとか…、死んで転生して…。

「あ、そうだつ、これでいいか」
「Hンド?」
「▼コンティーニューで登録します！」

「え、？」」「んてぬ？」

「了解しました」

「え？　え？」

どういう意味かわかつていなさそつた忌用を放つておき、俺は手続きをする。

紙にすらすらと文字を書きながら、なんとなく思つけれど、正直、俺は今ワクワクしている。これからこの世界で生きていくことに対して、だ。

もちろん前の世界への恋しさはあるし、家族に会いたい気持ちもそれやある。間違いだか罪に早く気付きたい。

けれど、だからといって、この世界を嫌えるわけじゃないのだ。忌月だってウェイブだって、いい奴がこの世界にいる。まあまだまだなにもわからないような俺だけれど、それでも、精一杯やっていけたらと思うのだ。

今俺らは、壁に貼られた以来の数々眺めていた。いや、主に俺ばかりなのだが、ちなみに今の自分の様子。

「料理料理料理……料理料理料理……」

…おそらく、おそらくだが、今の俺の状態はおそらくたいそう不気味なものなのだろう。引き気味の苦笑の声が忌用からしているし、

自分にも自覚はある。

けれど、だ、考えてもみてほしい。経験のない自分がいきなりモンスター討伐のような依頼が出来るだらうか。背伸びして無理な依頼をこなすより、こういう身の丈にあつたものを探す方が…、

「本音は？」

「今すぐ料理したい俺の両手が疼く辛抱ならん」

おつと口を滑らせてしまったようだ。いささか厨二病に近い言動もした気がするが気になら負けだ。

俺の言葉を聞いて忌月は思いつきり呆れた顔をしたが、特に文句もないようだ。さすがにいきなりモンスター討伐は無理だと忌月自身も思つてはいるようだ。

「んー？ キミら新入りくんか？」

「んあ？」

「へ？」

いきなり声をかけられて、振り向くとそこには青髪に糸目の同じ年くらいの少年がいた。周りのじつじつとした大人の冒険者達と比べると、少し異質のように感じる。けれどよくよく考えれば俺達も似たようなものだし、俺達くらいの歳の人たちも他にもいそうだった。けれどいきなり話しかけてきたことに驚き、俺と忌月は顔を見合わせる。

「…えーと、新入りです、はい。お前は？」
「ボクはロスト。よろしくなあ」

「ん？」

「えーと、俺恥ずつて言こます、ijiajiaはHンダ」

「あ、おー」

「なるほど、キゲツくんにHンダくんな、よひこべ」

「ijiajia、え、えと… わすど、せん」

「発音おかしこよつな…まあええわ、セニブナはこらで?」

俺はHンダじやねえ、と俺おつとも考えた、けれど、その前に…、

「か、関西弁つ!..?」

「かんせつべん?」

「なんやそれ? なんかの弁当か?」

関西弁は日本語じやねえか! なんでそんな風に変換されるんだよ…
いや待て、外国でも地域によってなまりがあるらしいから…、
こじでもそんなんまりにそ沿つて、俺の知ってる言葉のうちで反映さ
れる…とか?

ああもう深く考えるな考えたら負けだ! 異世界なんだからijiajia…

「ああーそういう、そういうえばキミな、わざわざ料理やらなんやら言
つとつたやろ、それの依頼受けたいん? クエスト」

「あ、ああ…、とりあえず料理したくてたまらない」

「…Hンダ…」

「…なんや変わった子やなあ…、くくつ、気にいったわ。料理の依
頼なら確かここらへんに…ほり、あつたで? 上から違うの貼られ
とつたからなあ。」これ、『料理人募集』の依頼

「お…まじで!…? ありがとうー、恥ず、行くぞ!」

「え、ちょっと、まず受付の人と言わないと…!」

「あ、そうだった、言つてくるな!」

だつと駆けていく俺。そんな俺の後ろで会話が聞こえた。

「Hンドくと面白に子やなかー、君らこいつから一緒になん?」「つこじの間からですよ。俺もHンドのひと、すこじつて思つて、尊敬してゐるんです」

「尊敬?」

「ええ、俺は、わざとHンドみたいになれないですから」

なにやら俺のことを話していくようだが、気にせずに呑付のイクシイに依頼のことを話す。俺のテンションの高さに変な顔をしていたが、事務的に受理をしてくれた。

俺は渡された用紙を持って忌用の元へと向かつ。

「やつてきた! ……けどお前はどうする? 料理したいの俺だけだけど……」

「まあせき合ひつよ。パーティ組んだんだしね」

笑つて言つ忌用。わかつてたけどやつぱりほつこつこ奴だな。

「まあお一人さん頑張つてなあ、ボクはボクのやることがあるから行つてくるわ。Hンドくん、キゲツくん頑張つてな

「はーい」

「…結局俺はHンドなのか…、どんどんHンドが広まつてへのか…」

「どうしたの? Hンド?」

「…わづびうでもこいや、忌用、わざと行へやー! 場所はサー

食堂だ! ほら早く

「あ、待つてよー。」

料理、料理料理料理! ! なにか作れるのだろうか、料理人募集と言つくらいだ。

俺は胸をワクワクさせながら、忌用を置いていく勢いで走り出した。

依頼と糸田の少年（後書き）

パーティ名決定。
とにかく料理がしたいようです。

頑固親父と料理人

「断る」

店に入り、依頼を見せて数秒。頑固そうないやにたくましい店主に断られました。

「つてはい！？ いきなり断るってどういうことっすか！？」
「どうしたもこづいたもねえよ。こんなガキに包丁なんか持たせられるか」

「なにおう！？ 僕は料理したくてここまで来たんだよ！ それなのに料理の腕も見ずに帰れ？ んなのありかよ！」

「腕？ お前みたいな経験もなさそうなガキに厨房は任せられるか！ 他の奴を呼んで来い！」

この頑固親父、聞く耳持たねえ…。

口調は乱暴な亭主だったが、おやりくこのおっさん自身が作つてあるだろ？このサニー亭の料理は美味そうだ。実際に食べてはいないが、料理の匂いが違う。素材本来の旨みを生かして、余計な調味料を使用していなさそうだ。このおっさんの腕もかなり良いんだろう。

で・も！ それでどうして僕に料理をさせてくれないんだ！ ウェイブのところでの世界の食材についてすごく勉強したさ！ モンスターや魔法のうんぬんかんぬんよりも頭の中にもスムーズに知識として入ってきた。それに忌月やウェイブにも絶賛されているんだ！

「だめなものはだめだ！ サッカと出で行け！」

「見た目で判断するなよ！」

「はんっ！ お前みたいなガキがなにを言つてゐる！」

「さつきからガキガキガキつて……！」

さつきから堂々巡りだ。けれどこのおっちゃんは本当に頭が固そうだから、もしかしたら無理なのかもしない、と諦めの気持ちが湧く。それに気付き、いけないいけない、とその考えを打ち消した。

「あの……」

「お前みたいな奴に任せられる料理はない！」

「だから実際に見ろつて！」

「見んでも想像つく、……お前見れば新入りの冒険者じゃないか？ つは、こんなことしてる暇があつたらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじやないか？」

「なんだと……つー？」

「あのおつ……」

一瞬頭に血が上りかけたが、忌用の声ではなくと我に返る。親父に怒鳴られてから、忌用はさつきから困ったような顔でおひおひしていつたが、意を決したように大声を上げた。

「なんだあ？」

俺と同じように怒りで我を忘れていたおっちゃん。忌用にかける声も些か怒氣孕んでいた。

「……亭主さんつて、顔怖いし、背も高いし、声低いし、力も強そう

だし、なんていうか、料理人には見えませんよね…」

「はあ？」

「…なんだと？」

おーおいおい、火に油注いでざつするんだよ、と瓶に油をひたすら前に、おっさんが前に歩み出た。

「俺を馬鹿にしてるのか…？」

「すぐ怒鳴るし、威圧感あるし、料理人っていつも冒険者ですよね…」

「…てめえ」

「つまり、貴方は料理人に見えません」

「忌用うつー?」

「…余程俺を馬鹿にしたいようだな…?」

おっさんの顔がまじで怖い。極道のよつな見た目のおえに声も低くその声で怒られるのはまじで怖い。

けれど忌用はおっさんから田を離れて堂々と立っていた。

「あなたが俺達のことを見た目で判断したから、こちらもあなたの対応と同じ返しをしただけですが、それで問題があるところですか？」

ぱちくり、と。俺は一瞬忌用が何言っているのかわからなかつた。馬鹿だからじゃない、びっくりしただけだ。

確かにおっさんは俺のことを見た目だけで料理が出来ないとか厨房に入るなどか、そんなことばかり言つていた。正直俺も良い気分じゃない。けれど、それはおっさんにの方にも確かに言えることだ。

「俺達の歳で経験が浅いと考えるのも本来おかしいはずです。それ

ならあなたは、一度も料理したことがないけれど成人した人になら料理を任せられると？ 廚房に入れられると？ あなたはそう言いたいのですか？」

「んなわけ……」

「なら余計な先入観は取つ払つて考えてください」

「なんだろう、忌月。

俺、料理したいだけなのに、なんでこんな状況なんだろ。忌月の言つていることは正論。これに言い返すことなんてできないだろう。お前口喧嘩強かつたのか、……いや、これは喧嘩じゃないか。お前怒つてないし。

「お願いですから、見た目だけで全てを拒否してしまつよ、視野の狭い人にはならないでください。俺の元いたせか……、国では、主に女性が料理などを行つていて、それが当たり前だといつの間にか俺は思い込んでいたんです。

「でも、エンドは違いました。俺が思い込んでたものを、自分から進んでやつていて、むしろ好きだとさえ言つていたんです。俺のいた国は男尊女卑の風習が強く、女性が行つていた家事を、好きだからやつてている、と知つて俺は驚きました。

「あなたも、料理は好きでしょう？ そのことを、わかつてくれさい」

なんていうか。

なんていうか、俺は忌月の元いた世界のことはまったく知らなかつた。教えてくれなかつたし、あまり言つたそつじやなかつたから、俺も聞かなかつた。

けれどそういう風習があつて、でも、俺のこと改めてくれて。

「なんていうかなあ。

すっげえ嬉しいわ。

「……俺も頭に血が上つていたようだ、すまない」

「え、えあ、はい……」

「謝られたよつー? 忌円すげえ……。このじめばかりはまじで忌円を尊敬したね。」

けれどまだ忌円の顔は曇っていた。そのことに俺が眉を顰めるまえに、忌円の口が開く。

「……先ほどの言葉……」

「……ん?」

「『『』』んなことしてる暇があつたらモンスター退治でもしてきたらどうだ? もさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか?』……ところづ言葉について、謝罪してください」

「おい、忌円?」

一字一句間違わずに覚えてたのかよ? と、あまり関係ない突っ込みを脳内で繰り出す。

「……これはHンドのことじゃなく、あなた自身の仕事のことに関して、侮辱してこます。人を蔑んで、そのうえ自分の仕事を馬鹿にしてるんですよ? いくら頭に血が昇つて言つた言葉だとしても、それはあなたにとつて許せる言葉ですか?」

ここで気付いた。多分、この言葉に関してだけ、だけど、恐らく俺に向かつて言われた、このおつさんにとってまったく関係ない暴言。

…理不尽な言葉。

これに対し、忌円は少し、怒っている。

「…Hンドはモンスター退治に怯える臆病者じゃない。」

謝罪、

してください。

頑固親父と料理人（後書き）

忌月くん怒りました。怒ると怖いんです、多分。
多分エンドくんぽかーん状態です。

なんていうか、なんというか。

忌月に押されてだかどうだかわからないけれど、あのおっさんから丁重な謝罪を頂いた。どうやら自分で言いすぎの直覚は合つたらしい。

俺達があまりにも若かったから、ちゃんとこなせるか不安になつて、つい断るなどと口から出た上に頭に血が昇りあんな言葉を吐いてしまつたとか。

見た目は怖いし、短期だけれどそつ悪い人じやないらしい。そうだよな、悪い人間がこんな美味そうな料理作れるわけないし。それで今俺は、厨房にいる。やつと入れたぜ……。

「まずは、なんでもいいから料理を作ってくれ

「なんでも？」

「ああ。出来るだけ時間のかからないものがいいな」「了解つす」

俺は厨房にある野菜を見てみた。じゃがいもにんじんピーマン etc …、この世界は食材も前の世界とあまり変わらない。まあそりやあここにしかないものも、ここにはないものもあるけれど。とりあえず…、料理だ、料理料理料理… イヤツホオオオオオイ！…………

まずは材料！ 何の卵かはしらんけど手♪じるな卵を頂く。それにこれまたなんの肉はわからないけど肉！ 多分獣肉的なあれなのだろうか…。それにピーマンと玉ねぎ、その他もうもろ。

まずは肉を細かく切る。玉ねぎもみじん切り。ピーマンも種と軸を取りつてみじん切り。あとイベリアキノコ（この近辺で取れる特産品）を四つに分けて切つて、水につける。これはイベリアキノコの臭みを取るために本に載っていた。

ソースにケチャップ、あと乾燥した魚やら野菜やらを使って作ったダシに塩コショウ、香辛料としてイベリア草（この近辺で以下略）を乾燥したものを碎いたものを炊いたご飯に混ぜる。

それからホワイトソースを作つておく。これは作つてから違つ場所に置き待機。

フライパンにサラダ油を投入し、肉、玉ねぎを炒め、少し立つてからピーマンとイベリアキノコを投入する。それからさつき作ったご飯を投入。混ぜながら全体で炒め上げる。それが終わったら皿に載せて形を整える。

そして最大の難所、卵。バターと油を塗つたフライパンに溶き卵を一気に流し込む。円を書くように混ぜながらいい半熟具合のところでご飯にぶつ掛ける。そこに先ほど作ったホワイトソース投入。ちゃんと暖めておかないと。

見映えのいいようにパセリなどを乗つけて…出来上がり！

「出来たぜおっさん！」

「ほう…」

ずっと俺の手際を見ていたおっさんが感嘆の息を漏らす。俺の手にあるのはオムライス。そりゃあ半熟具合にふわふわに仕上げたぜ！

おっさんのがスプーンを持つて、俺の料理に一匙入れる。ぱくり、と。食べてから大きく目を見開いた。

「うまい……」

「おお！ どうだ！」

「…見た目で判断するじゃないってことだな、本当に。…俺が間違つてたよ。悪かった」

「べ、別にもういいよ！ 俺、料理出来ただけでもういいし……」

本当に怒っているわけじゃなかつたのだ。つい、俺もムキになつてたけれど、料理人のおっさんからしてみれば、こんな俺みたいなガキに厨房を任せるとか、あまり我慢ならなかつたんだが。だから、本来おっさんが怒るのは当然のことだつたし、もうそのことについては怒るつもりはなかつた。

そんな俺の様子に、おっさんは眉を八の字にして笑つ。

「つは…、本当にお前は、料理が好きなんだなあ…」

『まつたく燕斗は、本当に料理が好きなんだなあ…』

…あ、

「父…さん…」

「ん？」

「あ、いや、なんでも…」

まづい。今のはまづかつた。全力でこれはまづい。

被つてしまつた。そう見えてしまつた。父親の優しげな顔に。もう、会つじとはないだろ？、父親に。

「ちょ、ちよつと外の空氣吸つてきます！ そのオムライスはぜひぞ食べてくださいー！」

「あ、おーー！」

俺はおっさんに顔を見られないように厨房から外へ出た。ドアを開けて出た瞬間、料理が出来ないので外の掃除中だった忌刃とぶつかる。

俺はその場所に尻餅をついた。忌刃も俺と同じような体勢になる。

「こつたあー……こきなりどうしたんだよHンダ…、…Hンダ…。」

「……」

「どうしたの？ Hンダ」

「……」

「……す」「ぐ泣きわな顔だよ？」

「……ひー！」

「あの人に嫌なことされた？ 怒られた？」

「…違うわ馬鹿」

「ひどいー…？」

なんとなく、昔の記憶がフラッシュバックして、頭の中がこんがらがつて。

また、会いたくなつて。

「どうしようもないのになあ…」

「どうしたの？ Hンダ」

「なんでもねえ…、少し外の空氣が吸いたくなつただけ。大丈夫だ、心配すんな」

「……、うん。わかつた」

俺の様子がおかしいことに気付いてるはずだ。けれど、なにも聞か

ない。その優しさが、すぐありがたかった。

なんてことはない、ただのホームシックだろ、俺。家族は向こうで生きているんだ。幸せでいてくれてるんだ。きっと俺が死んで、悲しんだらうけじ、けれど父さんも姉ちゃんも、強い人だから。だから、大丈夫だ。

「エンド、それでさ、料理はどうだった？」

「おう！ ふわっふわのオムライス、おっさんに大絶賛だったぜ！」

「おむら…？ エンドの故郷のご飯？」

「そうそう。今度お前にも作ってやるからな」

「わあ、楽しみだな」

多分これから先も、俺は前の世界でのことを恋しがるだろう。家族のこと、友達のこと…。どれもこれも大切なことだから。それでも、なんとかこの世界で生きていくひとつと思つ。

「これから頑張りつな、忌月！」

「うん！」

にかり、と忌月が少年らしい笑みを浮かべながら、片手を上げた。俺も似たように笑いながら、その手に向かつてパンツ、と自分の手を合わせた。

宿が決まりました

「親父い、料理の味がいつもと違うなあ！」

「気付いたか、今料理人一人雇つてんだよ！……娘が旅に出ちまつ

て大変だからな…」

「へえそうかい…もしかして男でも出来てたりするんじゃねえのか

?」

「んなつ！！ そんなわけあるか！」

「おお恐え恐え」

昼時になると店の中に人が続々と入つてくる。そのほとんどが冒険者の格好をしていた。

ちなみに一応冒険者な俺は鍋にブランチーを入れてフランベしている。…俺やつぱり料理人のほう田指そつかな…。

おっさんは料理をしたり皿を運んだりと大忙しだ。ちなみに忌用はやはり掃除をしている。

こつちを手伝わせようかと思つたけど、…こんな忙しく、体力を使つよつなことはやらせたらいけない気がした。早く体力つけろよ？

「おいエンド！ 次肉定食三つだ！」

「了解！」

ちなみにこのおっさんにもエンドと呼ばれている。もうわざわざ直すのも面倒くさくなつてきた。

俺は手早く鍋の肉を皿に盛り付け、ご飯を山盛りに入れていく。冒険者だから腹空かすだらうとこうおっさんの配慮だ。やっぱこの人

はいい人なのだろう。

「おっさん、出来たぞ！」

「おうよー、次は魚定食四つだ！ 急げよー！」

「わかった！」

ちなみにおっさんは俺が肉定食三つ作っている間に肉定食四つに魚定食三つ作っていた。やっぱプロは違うな…。けれど俺でも少しは誰かの役に立ってる感じなのでなんとなく嬉しい。

まあ、そんなこんなでピークを過ぎた頃。

「つたぐ、助かつたよ、お前案外筋がいいんだな」
「まあね」

自慢げに答える俺。おっさんみたいに早く作れなかつたけれど味は間違いなしだ。そこは本業との違いだろう。

「ほら、これは給料だ」
「え、そんなのギルドで…、」
「これはさっきの暴言も含めて、だ。悪かつたな。受け取ってくれるか？」
「は、はー！」

おっさんの手から銀貨一枚貰えた。ちなみに、ここでは銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で貨一枚、だ。

ちなみに、ここでの依頼の報酬は銀貨一枚。通常料金よりも少し多めにもらえるくらいだ。それの一倍。うはあ、と思わずため息が漏れ

た。

「やうだ、おっさん、こいつ辺に宿屋つてあるかな」

「ん？ それならこの近くに一軒あるが」

「そつか、それってどのくらいで泊まれる？」

「飯代抜きなら一泊銅貨一枚だ。銀貨一枚で十口泊まれる」

「じゃあそこそこよつかな…、おっさんありがと」

「おいちょうと待て、」

「うん？」

心中に知らせに行こうと思つたが、おっさんと呼び止められる。

「お前宿探していののか？」

「うん、俺ら今日来たばっかりだし」

「そつか…」

「おっさん？」

「だつたら俺の家を宿にしたりどうだ？」

「……へ？」

「お前の料理の腕はなかなかのもんだ。客にも評判が良かった。そこで、だ。依頼の仕事がないとき、ここの手伝いをしてくればそれで宿代はキャラ…、どうだ？ お前にひとつ悪い話じゃないと思うが」

「乗つた！」

即答だつた。そりやあそつだつ。俺が料理をするだけで宿代になるのだ。しかもすることといえば俺の好きなこと。確かに忙しかつたけれど、辛いわけじゃない。

「まじで？ まじで言つてる？ 嘘つて言わないと？」

「おひ、男に一言ほねえ。改めて紹介だ。俺はゴート・ロッケン。

まあおひさんでも親父でも好きに呼べや
「ねつー よろしくな！」

俺達ハコノトヨーノコー、依頼が完了した上宿も決まりました。

「…いつの間にそんな話を…」
「なんか奥さんもいるらしいんだけど、両方とも娘が旅に出て寂しいからってさ大歓迎らしい。やつたじやん、宿代浮くぜ？」「でもその代わりエンドが働くことになつて…、いいの？」
「むしろやりたい」
「…そうだね、Hンドはそうだったね…」

ギルドに戻り、報酬を貰つた。俺が『機嫌だつたのでイクシイに変な目で見られたが気にしないでおぐ。たくさん料理を作れて大満足だった。そのうえおひさんのところを宿に出来るし、また料理できるし、万々歳だ。

「おんや、また会つたなあ」

後ろからさつき聞いたばつかの声を聞いた。振り向くと青い髪に糸田の関西弁の人。

「ああ、ロストか」

「どうやつた？ 依頼。料理できた？」

「満足！ しかも宿も手に入つたし、いいこと頗くしだよ」

「ほーか、そら良かつたな。なあなあ、そんなに上手なら今度ボクにも作つてな？ 女の子の手料理やないのは残念やけど…」

「悪かつたな男で」

「ちやうねん聞いてや！ 」の前誰かのパーティに入つて依頼こなしどつたんよ、まあそれが一日では終わらんくてな、野宿することになつたんやけど…、そんときの飯がまずうて！ ありえんわあれ…、おかしそざるわ、ほんま」

「なんだよそりゃ…」

「あ、もしキミ、なんやそういう依頼があつたらボクも協力してもええで？ おいしい料理食べれんのならキミらに着いてくほうが絶対ええわ。いくらたくさん金払つたとしてももうあのパーティに着いて行きとうない」

「どんなもん食つたんだよ…、まあそういうときがあつたら頼むわ

案外こうこう軽い調子の冒険者もいるんだな…、と俺は少しだけ安心する。ってか本当何食つたんだよ。

そのとち、ロストに違つ男から声をかけられた。

「ロスト、リト知らない？」

「ん？ なんやまた振られたん？ アーク」

そこに来たのは焦げ茶色の髪に綺麗な青色の瞳をしたすらりと背の高い男だった。顔は整っているが、どことなく軽そうな雰囲気があり、あの自称神を彷彿とさせた。

そのアークと呼ばれた男は俺達の「」とこ気付く。

「「」の人たちは？」

「んとな、新入りくんや。エンドにキゲツ。あ、お一人さん、こん人はアークゆうん。同じ歳やから案外仲よしあせてもらつとるん」

「へえ、また同年代の人か。よろしく
「よろしく…」

なんだか、確かに同年代の男だつたけれど…どことなく、空気が違う気がした。あれ、とエンドは首を傾げる。なんというか、なんか違う。いや、違わないのに、なんか違う。いや、俺達みたいな違う世界から来たような、そんな空気じゃなくて、…なんなんだろうか。まあ気にしなくていいか。

「あ、アーランアーラン、この子な、料理美味いらしゃいん。珍しいやろ? 冒険者で料理美味くて。今度日数かける依頼行くんやつたら二この子持つてこ?」

「まじか。持つてけ持つてけ」

「…俺物じゃないんだけど」

なんだらう、料理人つて人気なのだろうか。忌月が苦笑いしている。

「いやー、」の前のときは俺吐いたからなー」

「そうそう、生焼けはないでほんまに」

…予想外に深刻そうだ。もし頼まれば料理でもなんでもしてあげよ。

「他に同年代の人とかいるのか?」

「んあー、あああと二人あるよ。そん一人ペアくんどうてな、可愛い女の子と男。なんや仲ようて…、ええなあ、ボクも彼女欲しいわ。そんくらいやわ、ボクが知ってるの」

「ん、そういうばせ、せふいるさんは?」

「セファイル? あああの可愛い子か。あの子は確か年下。可愛いよなー、ほんと」

「確かエンドその子助けたよね、」「…ひょい」と

「「ひょい」と！？」

「えー？」

なんか忌用の言葉に男一人が妙にテンション高い反応を返してきた。
え、なんなのこれ。

「ひょいと…抱き上げたんか！？」

「え、ちょ、」

「なにそれ羨ましい！ 僕なんかリトに振られっぱなしなのに…」

「それ関係なくね！」

なぜか攻められる俺。

この後散々詰問された。どうこうことだこれ。

家族に会いたいものです

「私はイマーー・ロッケン、歓迎するわあ

ゴートさんの家に来て出迎えてくれたのは奥さんだった。薄緑色の色
ふわふわした髪を後ろで纏めていて、優しそうな深緑色の瞳を瞳を
している。

なんというか、おっさんと同じ年と聞いていたが…、そりと見えな
いへりい若々しい。

「おーい、飯の準備が出来たぞー?」

「あらあらー…、ゴートったらすっかり張り切っちゃって。ほら、
いらっしゃい、 Honduras、キゲツくん

「はーい

「…結局 Honduras よ…」

家中に入ると、優しく暖かい匂いがふわり、と広った。おお、と
俺と忍丸は同時に声を上げる。それから顔を見合せて、おっさん
がこるであろう部屋に駆け込んだ。

食事も終わり、部屋に案内された。そこは一人部屋で、もつ独り立ちをした兄弟が使っていたらしい。

ベットが予想外にふかふかで、その感触を楽しんでもいると忌月が明日の予定について聞いてきた。

「どつかの雑務とかは？ んーでもなー…、やつぱりモンスター討伐とか経験しておいた方がいいか？」

「そうだよね。…料理はいつでも出来るんだし」

「お前体力的に大丈夫か？」

「む、そんなに馬鹿にしないでよ。俺だつて男だよ？」

「…確かに一般人の女以下…」

「うぐ、」

「…鍛えろよ？」

「うん……」

すっかり頃垂れる忌月を横目で見て、ヒンドはベットのシーツの中に入り込む。寝るぞ、と声をかければのそのそと忌月も同じようにベットに寝転がる。

「おやすみ」

「…おやすみ」

俺は目を瞑り、すぐに意識は闇の中に落ちた。

『あたしのシャツ、もう戻ったの?』

いや知らねえよ、姉ちゃんの部屋に置いたから勝手に無くした
んじゃねえ?

『燕斗一、父さんは今日はカレーがいいなあ……』

またかよ、一週間前にも作つたぞ俺。

『今田は燕斗の誕生日よね？あたしが作ってあげるわ！』

『むつ、これでもあたし、彼氏には料理上手だねって褒められてんのよ!』

『政治』

『どこの馬の骨だ！ 家に連れて来い！』

父さん、そんなことより仕事は？

『お、おお、今から行へや...、プレゼント買つてへんかうな！』

『彼女の話にまた戻る』

それ俺違くない？

『違くない！……はー、もうここわ。あたし達も学校へ行きましょ』

『あ、そうだ…』

『燕斗、誕生日おめでとう』

「Hンド、朝だよー。」

「……」

「Hンドへ。」

「夢、か…」

ああそりゃわかってたよ、これは夢でしかないって。
もうあの世界で俺は死んで、家族とも別れて。
もづ、念づけたり出来やしないんだってことさ。

「あー…最悪だ…」

「なに？ 嫌な夢でも見た？」

「その逆。幸せすぎて泣きそうだった

「…？」

「もづその話はいこよ、起られせて悪かったな？」

俺はベットから降りて、服を着替える。忌円はもづとひへり着替えていた。早起きなんだな、じいつ。

忌円は俺の様子を心配そうに眺めていた。じこつはわづと鋭いから

困る。あまり心配かけさせたくないのと、すぐ俺の変化に気づくから。

「……Hンド、俺はわ、この世界にいたくて良かったと思つみ~。」

ぴたり、といい俺の動きが止まってしまった。なにこれ、わかりやすく動搖してんじゃねえか、俺。

忌月は静かな口調で続ける。

「最初は、なんだこれって思つたけどさ……、この世界に来たおかげで、ウエイブさん、ゴートさん、イマニーさん、ロストくん、アークくん、そしてなにより、……Hンドに会えた」

「……忌月、」

「それは俺にとってなによりもの幸福に思えるんだ。だから言つた

い

真っ直ぐに忌月は俺の方を向く。それから、にやり、と歯を見せながら笑つた。

「Hンド、この世界に来てくれて、……ありがとひ

……、なんだらうか、なんて、言えぱいいのか。

勝手に俺は死んだんだよ、家族置いて。違う世界に転生させられて。ふざけんなつて思った。元に戻りたかった。でもさ、この世界に来て、ここで過いで、この世界も、悪いもんじやないんだらうなつてた。

「……うん、」

特に俺はすごい力を持つてるわけじゃないし、ただの料理好きの子

供だ。本当に、それだけだ。魔法を使えても、戦えたとしても、根本的なものは変わらない。

それでも、必要としてくれるのなら、少しでも、頑張りつつ思える。

「…彌月、行くぞ」

「うん！」

着替えた俺は部屋を出る。彌月もそれに続いて出てきた。相変わらずの狩衣姿だ。

そこで、ふと、俺は考える。

「こつは、元の世界を恋しく思わないのだろつか。

「なにこりんなお子様がこんなとこにきて来てるんだあ？」

げらげらと男達が笑い声を上げる。

「わかつていたさ、冒険者の中にはいい奴ばかりじゃないってことも。今日はロストもアークの姿も見えなかつた。いるのはこのいかにも嫌な奴らだけ。

いるんだよなー、やっぱり、こいつら冒険者。新入りイビリが好きな対して実力も無いくせに一流気取つてゐる奴。そういうの見苦しきつたらありやしねえ。

「…ヒンド、」

「ん？」

「全部口に出して」

「まじでか」

恐る恐る冒険者の方々の方を見ると顔を真っ赤にして血管をぴくぴくさせている。やべ、まずったか。

「けつ、エランクの奴らが俺達に楯突いてんじゃねーよ！」

「そうだ！ てめーらみたいな雑魚は雑用でもやつてたらいいんだよー。」

うわあ本当に嫌な奴の典型的なパターンだ。俺は心の底からげんなりする。

ちなみにエランクといつのまほのギルドのワソクのことだ。F、E、D、C、B、A、S、SS、SSSといつの具合に分かれている。俺達はギルドに入りたてだからエランク。

余程新入りとイビリたいのかそのことをやたら強調してくれる。

「じつにう人はどいでもいるもんなんだなあ……」

ぼそりと呪罵が小声で呴ぐ。おうお前のところもか。やはり共通なんだよな…。俺は思わずため息をつく。その様子が気に障ったのかこいつの顔がまた一段と怒りで赤く染まつた。あ、まずった？

「つたく舐めやがつて……」じつにう奴は一度痛い目みないとわからなじょうだな……？

え、これなんのイベント？

「こやいやいや、暴力反対です、やつこのよくなこと思こます」

「はあ？ 惨氣づいたか？」

「挑発はいいですか」「これは穩便に済ませましょ？ ね？」

俺と忌刃で宥めようとする、けれど何故か男の顔はさりと怒りに染
まつたようだ。あれ？ 言葉の選択ミス？

これは殴られるフラグ？ もうじょうかなー…などと半ば焦つて
る、声が響く。

「見苦しきぞ」

凛、と透き通る声。見ればそこには金色の髪を横に長くたらし、後
ろの頭の真ん中付近で縛つた、翡翠色の目を持つたいわゆる美つく
少年が。

「低レベルのものが低レベルのものを蔑んで、お前には誇りと言つ
ものがないのか。見ていて気分が悪い」

「なんだと！？ ロード・クオーツ！」

「私の名前を呼ばないで貰おうか。汚れてしまいそうなのでね」

せ…、性格悪つ！？ なんか俺達も低レベルとか言われてるし…。
こんな奴も多いんだな…、とほろりと泣きそうになる。

ロードと呼ばれた男は優雅な仕草で依頼書を取り、受付へ行く。ち
らりと見えたが、それはBランクの依頼書。なるほど、あいつらよ
り格上なのですか。

「あの男性格悪そだよなー…」

「…？ エンド、なんか君勘違いしてそうなんだけど…、」

「なんだ？」

「あの子、男じゃなくて女の子だよ？」

「…なんだと？」

美少年じゃなくて、美少女でした。

黒犬には注意しましょつ

ただいま、森の中。

あれから男達もばりばりに遊びに行ってしまった、なんとか依頼をじっくり見ることが出来た。

ちなみに俺達は採集クエストでここに来ている。イベリア草とイベリアキノコという特產品をとるだけだ。これはランクでも出来る依頼。

モンスターが出る危険性があるからひやつてギルドに頼んでいるらしい。

「Hンゲー、こちにもあるよー」
「りょーかい」

うつそ、やっぱり、冒險者とかギルドとか聞いてると、なんだか危険な感じもしたけれど、いつもやつてのんびり依頼をこなすのもいいもんだ。

命かけてモンスター討伐より断然いいもんな。

「うわ、うわきだ、可愛いなー」
「ほんっとのんびりだわ…」

のんびりスローライフで冒險者生活？ いいじゃんそれ、なんか楽しそう。

採集クエストはイベリア草イベリアキノコ両方とも30個ほど。少し多めにサービスしつくか。あ、ついてに俺の料理の材料にも。

「…グルルルルルルル」

「ん？ 腹の音かな？ まつたく、こんな大きな音出して！ ショ
うがねえな！」

「…違う、現実逃避と違う。これ明らかに腹の音と違う唸り声だけ
れど、俺は信じない。だから現実逃避と違うから！」

「…ヒンド、ぶらつぐどうぐだよ。…幾分前の子たちかな…、住処
は確か森の中だし、俺達囮まれてるし、性格は執念深いから…」
「ちくしょつまた」の展開！？」

森の中で光る。それが何十にも…、つわ、もしや死亡フラグ？
戦つたって、そんなのウェイブのところで修行して以来だ。うま
く使えるかわからない。

「…彌月さんどうしますか」
「…どうしまじょうかねえ」

とりあえず採集したもの鞄の中に入れた。数も十分。問題はどうやら
つて逃げ切るか、だ。

あの煙玉をもう一度使うか？ そう思つけれど全体的に囮まれてい
る。逃げ道が無い。

「ヒンド、じいはもう覚悟決めるしかないんじゃない？」

「… 平然と言つてゐるように聞こえるけど、お前の顔青いぞ」

「まじか」

「無理すんな。… でも、そりだよな、覚悟決めた方がいいのかもな

…」

なんだかんだ言つて、この前も逃げたけれど、実際は戦う覚悟が無かつただけだ。この場所での戦つてことは、命を奪つてことと同意義なのだ。

「あー！ 簡単なクエストのはずだったのに…

「忌月！ 行くぞ！」

「…わかつた！」

両方とも臨戦態勢をとる。

なるべく殺さずに、逃げる形で！ 体内で魔力を練り上げる。

魔法はイメージ。魔力を練り上げて形にする。

俺は大量に魔力を消費するような攻撃魔法をするつもりはない。そうすればたくさんのが命を落とすことがわかつている。

俺はクラウチングスタートの体勢をとった。背後は忌月が守つてくれている。

魔力を足に、少量だけれど、足の先とは反対側一点に集中させる。どうやら俺の器用さはそのまま魔力にも反映されるようだった。

「かそ…く…！」

ぐわっ、と。風属性の魔力を一気に放出させ、風を起こす。一瞬からだが軽くなり、一気にブラックドックたちの前に出た。いきなり俺が出てきて、反応できないのかブラックドックたちの体が強張る。俺は両手に魔力を溜め、その場にぱちんと両手を叩きつけるよう

についた。瞬間ばふんっと音がなり、砂塵と共にブラックドックたちが吹つ飛ぶ。

これはただ風の魔力を起してその場に叩きつけ、強風を発生させただけだ。特に名前も無く、魔法と言つよりも魔力の放出により起こつた風そのものだ。けれどこれのおかげで半数が怯んでくれた。

「忌用！」

「わかつてゐ！ エンド、耳塞いで！」

俺は言われたとおりに両耳に手を当てた。忌用が両腕に魔力を溜める。それからばしんと、その手と手を叩き合わせた。けれど、それだけで、ばしんっと音が森全体に響き渡るような強大な音となる。ブラックドックは鼻だけでなくその耳も精度が高い。ブラックドックたちがその音に驚き飛び上がり、腹を向けるよつとして倒れた。泡を吹いているものもいる。

忌用の方にいたブラックドックたちも退治できたようだ。

「…ショック死、とか、ないよね？」

「多分大丈夫だ。…多分だけど」

なんとなく、両者とも嫌な気分になる。
それを抑えて、帰路についた。

なんとなくだけれど、いつもやつてモンスターを傷つけるのも、そのうち慣れていくんだらうな、とか思つ。
きっとそれはこの世界では普通のことなんだろう。わかるさ、それはわかる。

「なんか物悲しいよね…」

「そうだな…」

「でも、覚悟決めなあやこけないんだよなあ…」

「んま、そうしなきゃ、俺達がやられるんだからな」

「Hンド、」

「ん」

「頑張るつむ

「ああ」

「ビウコウ」とだー…?」

ギルドに帰ると、そこには今日いた、あの新人イビリをやりそうな乱暴者の男がいた。ビウしたんだ、と近くには寄らないが様子を見る。

その男につづかかられていたのは、青髪に糸田の…ロスト…？　あいつなにやつてんだ！？

「ビウコウともなにも、キララのパーティに入りたくないゆつとるん。聞こえんかった？」

「だからなんでだつて聞いてるんだよー」

あれは…ロストを勧誘してるのだらうか。俺達のことはお子様とか言つ割には、俺達と同じ年のロストのこととは勧誘するのか…、と呆れる。

そういうえばロストは強いのだらうか。それひくん、よく聞いていいないから知らないのだ。

「だからなんだってなあ…」

「なんなんだよ…」

「だつてキミらの料理まづいんやもん…」

「…ん？ あれ？」

「肉は生焼け、植物をそのまま食べるし、保存食の乾いた食べもんばつか！ 嫌になるよな、嫌にならん？ ボクは嫌や！」

「そ、そんだけで…！」

「そんだけってなんやねん！ これは重要なことやねんぞー…？」

なんだか力説している。ほんとそれいまでまづかつたのか…。そう、ぎゃーぎゃー騒いでたロストだつたけれど、ふと、静かになる。なんだ、と思つた瞬間、ロストの雰囲気ががらりと変わる。冷たいものを含ませたその空氣に、知らぬ間に鳥肌がたつていた。

「…それに、キミ、えらい態度悪いらしいよな？ 自分のランク以下の人を馬鹿にしつけて…ボク、そういう人嫌いやねん」

「い、いや、そんなことは…」

「そんなことは？ なに？ ボクな、弱いものいじめ嫌いなん知つとるよな？ 前、注意したよな？」

「そ、それは…」

「悪いけれど、君のパーティ入ることほむつ一生ないで？ そこんどこわかつてな？ いくら温厚なボクでも、…怒るで…」

そこそく、ロストと田が合つた。ぱあ、と顔が明るくなる。え、なに、と思つ間に、田の前までロストが駆けてきた。

「ちゅうじええ！ ボクはこの子らのパーティに入るわ！」

「「はあつー?」

俺と彌月が同時に言つた。なに、どうこいつことなの? セツノヅカからないんだけどこの状況。

「いやな? ボクな、最近パーティー勧誘激しいんよ、それならキーハンとこ入ろうかなって」

「いやいやいや、意味わからんだけど」

「ボクなあ、キミらみたいな変わった子の方が好きやねん、なんかすぐ戦い戦い、なんていう乱暴者よりかずうーっと」

「は、はあ…」

「それに料理美味しいなら最高やん! 最高やん! ?」

くるり、とロストが方向転換して、先ほどの乱暴者の冒険者に向き直る。それからいやに爽やかな笑みを見せた。

「ここのボク、ロストはここの子たちのパーティーに入るの、もう勧誘はしないでください! …これでええかな?」

いやよくねえよ、なに勝手に決めてんだよ!

「あ、そつそつ、ボクAランクやからそれなりに役に立つと思つて?」

いやだから…、ん?

…Aランク?

黒犬には注意しましょう（後書き）

仲間が増えたようです。

仲間が増えました

FランクからDランクまでに上がるのにはほど難しくない。問題はCランクからだった。

Cランクでさえ、あのブラックドックの群れを一撃で退治するくらいの能力が無いといけない。Bランクは、大型モンスターの群れに一人で立ち向かうレベル。そしてAランクは…、一人でドラゴンを倒しに行けるレベル。

ドラゴンというのは想像の通り強い。大きな牙、鋭い爪、ぎょろりとした目玉、長く太い尾…、SランクやらSSランク、SSSランクは存在しているだけであって、このギルドにはいないに等しい。つまり、Aランクということは 無茶苦茶強いということなのだ。

「へへっ！？」

俺が何も言えないで口をぱくぱくさせていると、それに気付いたロストが間抜けな顔やなあ、とけらけら笑う。いや、お前のせいだよ。

「キミのパーティ、↙コントローラーへ言つんやつけ？ 入るわ入るわー、なあ？ ええよな？」

「あ、うん…」
「お、おい待てよ！」

なおも追い縋る乱暴者の冒険者。そこまでロストをパーティ入れたのか。まあ、確かにロストはAランクらしいし、話を聞いてる限りじゃ、一度あの冒険者ともクエストに行つたんだと思う。だからあいつはロストに頼み込めば、自分達のパーティに来てくれると？

「なあ、あいつらがランクなんだぜ？ あの程度の奴らなんかにお前は合わねえよ…、なんせお前は△ランクなんだし？」

「……」

『機嫌をとる』ように男はロストに近づく。俺は、一瞬あいつがなにを言つているのかわからなかつた。

聞こえるのは、ランクを強調する言葉。

…なんだこいつ、人をランクだけで区別してるので？ それだけで？ もしかしてそれだけの理由でロストを勧誘してるので？

たつた、それだけで？

「ロストはロストなのでランクだけで決めてんじゃねーか」の口づけ

「」

「はあ！？」

「ぶつ」

…あれ？ 今俺、なに言つたつけ？

なんかロストさん腹抱えて笑つてんすけど。『凶悪さん』ぐく哀れなものを見る目で見てきてるんですけど、乱暴者の冒険者さん、さらには顔真っ赤にして怒つてるんですけど…

「て、めえ…！」

「わわわ、ちよ、タンマ… そんなに怒りんで… さすがに△コウハは悪かった！ 本当のこと言われるのって辛いよなー」

「んなつ！？」

「ふほあつ！」

さういふきだすロスト。え、俺変なこと言つたか？ …なぜか目の前の冒険者さんは怒りのゲージが振り切れます。え、なんで？

「！」の野郎！」

ついに田の前の冒険者が腕を大きく振上げた。ちなみに男は体長2mに近いんぢやないかってくらい大男。あ、やべこれ死ぬんぢゃね？　と、ぼんやり思う。

つてそんなこと考えてる暇ねえじやん逃げないとけねえじやん。でも、逃げるよりも男の拳が呑きつけられる方が十分早そうだ。これは、歯の一本覚悟しなくちやいけないんだろうな…、とそういう感じたときだつた。

バシイツ

田を閉じる暇もなかつたのに、いつの間にかロストが田の前に移動していく、その重そうな拳を片手で軽く触れるようにしていただけなのに受け止めていた。

…え？

「あんなー、ボクのトモダチになにしてくれとるん？」

「は…いや…」

「ボクな、しつこい人、嫌いやねん」

あくまで朗らかな調子で。笑顔を崩さずに。それなのに田の前の冒険者は青ざめて、酷く怯えた表情になつていた。…ロスト、お前何者なんだよ。

「それにキミ、違つ人のクエストを自分がやつたもんとして報告してるらしいな？」

「な、なんでそれを…！」

「ズルの上でのヒランクなんてなんもかしこよくなないわ。キミみた

いなクズはボクにはいらん

「……んな！」

「逆切れする気？ キリ程度の実力でボクに勝てるとでも思つたら

ん？」

「……ひ」

台詞をがんがんぶちこんで、相手を追い詰めていく。なんだかロスト恐こえーとまるで人事のように思つていた。

・そんな奴が俺のパーティに入るとか、なんかすげへね？

「…まあ、ここいら辺で勘弁しどこでやるわ、エンドトイくん、もうボクを勧誘せんでな？」

「うぐ……」

「…まさか本氣で入るの？」
「本氣やで？ だつてその方が楽そうやもん。メンドかつたんよな

・、知らん人に勧誘されて勧誘されて…嫌になるつちゅーもんや。…もしかしてボク入らん方がよかつたん？」
「いやそういうわけじゃねーよ。でも俺達そつそつ強引クエストやるわけじゃねーぞ？」

「…？ キミらボクに任せてくれてもええんやで？ それくらいの働きは…」

「まじでか！ なら」こんどイベリア草といベリアキノコ採集するときにブラックドック来たら追い払つてもらうつか…」
「恨まれてるもんね、俺ら」

「……ふ、……ふ、くくくく……」

「ん？」

「どうしたんですか？」

「いや、ボクな、Aランクやん？ 白髪やないけど、それなりに強いん……だからな、ボクを入れたパーティが、その力に合わないくらいのクエストに参加することが多いん」「身の丈に合わない依頼を、……ってこと？」

「うん、でもキミらは変わらへんなあつて」

「当たり前だ。んな恐いとこいけるか」

「そうだよねえ、そんな恐いところ行つて、また面倒くさいことになつたら困るもんねえ」

「……」「うペースのがええねんボク」

ぬふふ、と変な声をあげながらロストが笑う。ロストはAランクだとしても、性格は悪くない。むしろ良い方だと思ひ。だからこそ、そうやっていろんなパーティに入つていただろう。そう考へると、のんびりやつていこう、なんて考へていて俺らは珍しいのかもな、となんとなく思った。

まあ、そんなことで、△コンティーニューにAランクの冒険者、ロストが入つた。

仲間が増えました（後書き）

ロストさんが「コンティニューム」に加入了。

ひみつ事件のみの件ですが

「…へえ、で、ロストが入ったと」

「もうなんだよ」

「くははっ、あこつらしこなあ…」

俺は昨日のことを休憩用の椅子に座りながら、テーブルを挟んで、ちゅうどいたアークに聞かせていた。けらけらと笑うアークを見ているとほつとする。やっぱりいい奴も多いんだよな…、と考え。ちなみに今日は忌用もロストもここにはいない。忌用はゴートさんから頼まれた買い物、ロストは気晴らしにモンスターを討伐に行くらしい。気晴らじについておい。簡単に言つもんだな…。

「ちなみにアークのランクは?」

「Bだよ」

「うつわ…お前も高いんだな…」

「まあそれで勧誘もわりとあるけどさ? 俺そういうのかわすの得意だからさ。なんなら君のところに入つてあげよつか?」

「勘弁。ロストの件で一部の奴らから睨まれてるのにじうじしてまた敵作らなねえといけないんだ。俺はのんびりやりたいの」

「なーんだ。それはそれで傷つくなー。つてか君も変わってるね? 普通そう言われたら断らないと思うんだけどなあ」

「俺らは好き勝手自由にやつてたいんだよ。なんか有名になるとかそんなの考えてねーんだよ」

「なるほどー、ロストの言つた通り面白いね」

「までも今日は一人だし、適当なお手伝いでも探そつかなつて思つてるよ。こののねーかな

先ほど依頼の紙が張られている場所で散々悩んだのだが、どうにも一人で行うには心もとないもの多かった。なにぶんまだこちらは初心者の位置なのだ。

「ヒンドゥーの特技ってなんなの？」

「特技？ … 料理」

「… それ以外で」

「んー、あと器用つてどこかなー」

「器用？ どんな風に？」

「んー例えば…」

俺はテーブルの上に載っていたメモ帳を千切る。それからそれを簡単に折っていく。アークはきょとんとした顔をしていた。それをちらりと見ながら、手の中のものを形にしていく。

出来上がつてくれて、アークの顔がどんどん輝いていくのがわかる。それを気にせずメモ帳を折り進め、出来上がったものをテーブルの上に乗せた。

「ほい、ゴブリン」

「すげえええええええっ！…！」

アーク、なぜ叫ぶ。

子供のように顔をきりっとさせて俺が作ったゴブリン（オリジナル）を手に取り眺める。

そこまですごいもんかな…と俺は呆れながら、もう一枚メモ帳を千切つた。

「なあなあ！ これどうやって作つた？」

「覚えてない。即興だから」

「まじで！？ いいなーこれ、貰つていい！？」

「そんなものでよかつたら。それとほら、」

わいせりとした田で俺の折った「プリンを見てるアーヴにもう一度声をかけながら、テーブルに紙で作った犬を乗せる。そここの頭の辺りを人差し指でちょん、と触る。そこから微量の魔力を注いだ。

「まあ、こんな感じで器用」

「おおー！」

ぐるぐると動き回る折り紙の犬。ぴょんっと跳ねながらそれはアークの腕に乗る。

「す」「い！ 君す」「いな！」

「…俺からしたらお前の方がよっぽどす」「…と思つただけどな…」

Bランクなんだし。それでもアーケは俺の作った折り紙の方をお気に召したようだ。うーん、いまいち考へてることよくわかんないな…。

そのとき、ギルドに駆け込む足音が聞こえた。なんなんだ、と、興味本位で騒ぎのある方を覗き込んだ。そしたらぱっちらと今うの蒼の田。

「ん？」

「セフイル？」

「あああっ！ ハンドさん！」

ぱたぱたとこちらに駆け寄り、抱きついてくるセフイル。いきなり

のことにのはあつ！？ と変な声が漏れた。

なにそれ羨ましい！ なんてアークから聞こえた気がしたが無視して、「どうしたんだ？」とセフィルに問いかけた。

「た、助けて欲しいんです……！」い、妹が……！」

「は？ え、妹いたんだ」

「はい！ ……ってそうじゃなくて、そうじゃないんです！」

「わ、わかった！ 聞くから落ち着け！ な？」

ぽんぽん、とセフィルの頭を撫でる。この荒れた様子はおかしい。何か大変なことが起こったんだろうか。

「は、はい……、実は、妹が……、妹が、盗賊に、」

「……盗賊、に？」

「盗賊に、攫われて……！」

「あーはいはい、このパターンはわかるよ。助けて欲しいってことだろ？」

「つたく、なんで俺みたいな初心者に頼むのかねえ。ってかセフィルだつて冒険者だろ一応。

「……まったく、本当に、なんで俺に頼むんだか。

「……行くしか、なくなるじゃねえか。

「……た？」

「……へ？」

「……どこで、攫われた？」

「北の森です！」

「…わかった」

「…わかつたつて…エンドリッチャ、行くの」

「そりゃ行くだろ」

「一人で？」

「まあそうだな」

よつこらせ、と俺は立ち上がる。北の森は知っているから道の方は大丈夫だ。つたぐ、強制イベントかよ、しかもこれ命の危険性大だよなあ…。

まあ、断るつていう選択肢を選ぶ気なんてゼロだけどさ。

「…君は本当に不思議な人だな」

「ん？」

「面倒」とに突っ込みたくないのかな、と思つたら、進んで行つたり、予測がつかない

「…言つただろ？」

俺はにかり、と笑つて見せた。

「『好き勝手自由にやつしたいんだよ』ってさ」

そうだ。セフィルのことだつて強制されているわけでもない。断れるものだ。

けれど、俺はやりたいからやるのであって。ほつとけないから行くのであって。それこそ面倒」とではあるけれど、けれどやらなかつたら後悔するものなんだ。

「んじやあ行つてくれる」

「…俺も行くよ」

「は？」

「まあ俺がいた方がいいと思うよー？ 僕強いしー」

「いや、まあそしたらありがたいんだけど…」

「じゃあ行こうか！」

「あ、おい！」

アークが俺より前に出る。俺は慌ててその後を追いかけた。セフィルも同じように着いてくる。

「あ、あの！ すい…ません」

「なんで謝るの？」

「あ、あの、迷惑かけた…ので、」

「どー」が迷惑なんだよ？ 妹、…家族を大切に思う気持ちはないの迷惑にもならないわ」

俺はセフィルに笑いかける。うつすら涙目だったのが、さらに潤み、若干顔も赤くなっている。

「…人を引き付ける才能を持つてるんだな、君は」

「ん？」

「なんでもない、行こうか」

俺達は、北の森に向かって歩き出した。

魔力探知は便利です

「盗賊は最近頻繁に北の森で人を襲っているらしいんです。特に若い娘を狙つて…、私の場合、妹が幼かつたから、売れると思つたんでしょうね」

北の森へ向かう道中で、セフィルが説明してくれた。確かに子供の方が攫いやすいし、売るのにもそういうやりやすい、みたいなものがあるのかもしれない。

この世界にはこういう人を攫つて売ることもあるのか、と悲しくなる。

「盗賊ね…探すのに苦労しそうだけどね。そりやあ奴らだつて隠れるだらうし」「……」「ところで君なんで、ヒンドっちに頼んだの?」「へ?」

さつきから思つてたんだけどさ、と繋げてアーヴが呟く。

「だつてヒンドっち特に強いわけでもないじゃん」

「…はつきり言つなあ…」「でつー…でもでも…」

慌ててセフィルが弁解する。

「ヒンドさん、前、ブラックドックの群れから助けてくれたし、優

し、… その… かつこいこし…」

「…俺、かつこいいの？」

「言われた本人がそんなこと言つたらな…」

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俺を褒めてくれている。まあこんな可愛い子に褒められて悪い氣する男はいないわな。
何故かアークが俺のことをすごい目にで睨みつけてくるのは氣のせいとしよう。『ざざざざ…』とかいう効果音も『羨ましい…』なんていう滋きも氣のせいだ、うん。

「…見えてきた…」

北の森。聞いた話によると、モンスターがたくさん出でるといつ。たくさん…。種類は下級モンスターから中級モンスター、上級モンスターも少なからずいるといつ多種多様。やばい、なんか恐くなつてきた。

…でも、セフィルの妹の方が今頃恐い思いをしているんだよな…。
そう考へると頑張らなくちゃ、といつ気持ちが湧いてくる。

「エンドリッち大丈夫か？」

「多分… なあ、これ下手すれば死ぬ？」

「まあ そうだろうね」

「…気張つてくか」

軽い調子で言わされました。まあ そつだよな…、理解はしているんだよ。

死ぬのは恐い。一度死んだ身にとつても。

でも、やめるつていふことはハナから考えてないんだよなあ。

俺達は森の中に足を踏み入れた。耳障りな鳥の声がたまに響き、不安な気持ちをさらに駆り立てる。

雰囲気がやばい。今にも茂みからモンスターとかが飛び出してきそうだ。

木々が鬱々と生い茂り、暗い雰囲気を醸し出している。やうに日の光が気によつて遮られて、雰囲気じおり暗い。

なんか空氣が淀んでこる気がしてきた…。くやー 同じ森なのになんでウロイブのとことこまで違うんだよー

「なんでこなんとこまで来たの？」

「（）でしか取れない薬草を探しに来たんです。普通に買つと高い…。でも…買えばよかつたんですね。そのせいで、妹は…」

「おじセフィル、こんな暗い森でそらに暗くなんなよ。盗賊とお前のことは無関係。気に病みすぎなんだよ」

「でも！」

「妹は必ず助ける…信じられねーか？」

「…いえ、信じてます」

「……ぶつ瀆したい…」

「あれ？ なんか不穏な咳きが聞こえたような気がするんですが？ ぱっとアークの方に振り向けば、いやにあらきらとした笑顔を自然に振りまいていた。…なんなんだろう、あの咳き、『リア充爆破しふ』みたいな響きが含まれていたよつな…。

「あー、あそこです！ あそこで盗賊に襲われたんですよ！」

急にセフィルが声を上げた。指を指しながらその場所を示す。

そこは他と似たような場所だったが、木の根もとの方に見慣れない

草が生えていた。多分、あれが薬草なんだろう。

それに争つた形跡があり、土が少しおけたり、草が歪んでいたりしていた。

「問題はここからどうやって…」

「ねえセフィルちゃん、盗賊か妹ちゃん魔法使つたりした?」

「へ? …確かに、盗賊が風の魔法を使って、目隠しましを…」

「…まだ残ってるかな?」

なにが、と聞く前にアーケがその場所に立つ。それから強く目を瞑り、ぶつぶつと何かを唱えだした。

ぶわり、と魔力の波長が広がり、足元に幾何学的な模様が浮かび上がる。

魔法…?

アーケの髪がふわり、と靡く。…そういうえばここにつけられれば綺麗な顔立ちをしている。ちくしょうこのイケメンが。…ってそんなこと考へてる場合じやなかつた。

フォン、と薄緑色の膜が波紋のように森に響き渡る。

「【魔力探知】…」

セフィルがぼそり、と呟いた。魔力探知? なんだそりや。

「……北西670m、そこで途切れてる。ここで使つた魔力量から察するに…そこであつてると思う」

「…? おい、お前なにしたんだ?」

「なについて、魔力を探知したんだけど?」

「はあ?」

「あ、あのですね! 魔法を使つた際に魔力跡というものがつくんですね? それはしばらくの間、まあ魔力を使つた分だけですが…、

水から上がった後に、地面にしつく水滴のよじて、使ってすぐは結構残るものなんです」

「つまりそれを探知するつてわけ」

「でも、それ使える人少ないんですね！　すごいです！」

「よしもと褒めてくれ！」

なるほど、人は見かけによらないつてことか。軽そうな外見とは裏腹に実力はあるつてことだらう。

「予測はついたから行つてみようか

「ん、わかった」

俺たちはアーチが示す方へ着いていく。歩いてるうちごと、どんどん木々の率が増えていき、進みにくい。なんだかよりいつそう雰囲気が禍々しくなつてきた。

…本当に大丈夫だろうか？

家族は大切ですね

「…あそこか…？」

「だらうね」

「はわわわわ…」

茂みに隠れながら、盗賊たちのアジトを見る。そこは一見してみると、木で出来た普通の家に見える。それを指摘すると、ああいう盗賊つてのは点々と移動してるもんなんだよ、離れてるときに見つけられてもそれほどまでに怪しまれないだろ？ と的確な答えを頂いた。

さて、どうやって妹さんを助けようか、と考える。そのまま突っ込んだらさすがにやばい。下手したら妹さんを人質に取られるだろうし、どうするべきか。ちら、とセフィルを見れば、今にもアジトに突っ込んでいきそうな顔をしている。おいおい落ち着けよ。

「エンドritch、どうやって侵入する？」

「うーん…、せめて妹さんの位置が正確にわかればな…、お前の魔力探知？ で出来ない？」

「もう時間が立ち過ぎたから無理」

「うーん、まいつたな、助けるにしても、もし特攻して妹さんまで傷つけたら最悪だし…、」

「い、位置なら…」

急にセフィルが声を張り上げた。俺達は慌ててセフィルの口を塞ぐ。

「馬鹿つ、大きな声出すな…」

「す、すみません…、で、でもでも…、妹の位置なら大体わかります…」

「まじで…?」

「家族ですか…、近ければ、なんとなくわかるんです」

家族、との響きにずきん、と胸の奥が痛んだ。けれど頭を振つてそれを打ち消し、それじゃあ頼む、とセフィルに言つた。

今はそんなノスタルジーな思いに浸つてゐる暇じゃないじゃないか、この馬鹿。

「えーと、えとえと…あの、窓の下辺りから、妹の気配を感じます」

「窓の下…、ちょうどいいですね」

「え？」

ぺろり、とアークが唇を舐めた。その熱をこめた目を見て思つ。なんだらう、なんかこいつ、…楽しんでる?

「…お前、なに考へてるの?」

「え? 妹ちゃん助けたいってことだけだよ?」

わざとらしく笑みに、やはり違和感が拭えない。けれど、そんなことを考へてる費ももなく、これ以上追求するのはやめにした。いい奴なのだ。そう思つただけれど、なんとなく、空気が違つ。決定的に違う何かがある。

本当に何者なんだらう、このつは。

「…つま、そんなことせううでもいいか…」

「亨二つち?」

「アーク、行くぞ? セフィルはここにいてくれ」

「え、ええっ！？ そんな、私も…」

「いいから、」

出来る限り優しく笑う。

「待つててくれ」

セフィルがう、と止まる。まあそりゃあな、怖いだろう。妹が連れ去られて。怖くて怖くて、不安で仕方が無くて、無事でいて欲しくて。

わかるや、その気持ち。

「必ず、助けるから」

だから俺は絶対に助けるし、守りきつてみせる。いくら俺が弱くても、まだ冒険初心者でも、それでも、俺は助けたいんだ。結局のところ、俺だつて死んで、家族を悲しませたんだから。

「わかり、ました」

「うん」

ぽん、と頭に手を置いてから、にっこり笑ってみせる。少しでも、安心させたかった。

家族は大事だ。すごく大事だ。とても、大切にしなければいけないものなんだ。だから、守る。助ける。救う。俺はヒーローじゃないし、そうなれるとも思えない。もしかしたら死ぬかもしれないし、恐怖だつてある。けれどセフィルだつて、妹が盗賊に攫われて、怖がっている。家族を失う恐怖に。

俺とアークは静かにアジトに近づく。どうやら酒でも飲んでいるよ

うで騒がしく、ときおり笑い声が耳障りに響く。

ふと、アークが静かに俺に問うた。

「…ねえ、どうしてそこまでできるの?」

「え?」

「だつてさ、これは正式な依頼じゃない。それに言つたらあなんだ
けど君はフランクだ。俺としても君がそこまで強いとも思えない。
しかも…君とセフィルちゃん、会うの一回目、だよね? …どうし
てさ、そこまでできるのかなって思つて…」

「なんだよ、悪いのか?」

「とんでもない、素晴らしいことだと思つよ。…でもや、いつも
ことをする人つて大抵裏があるんだよ。俺もそういう人をたくさん
見てきた。だからさ、正直戸惑つているんだよ。俺には、君に裏が
あるように見えないからさ」

「そりなの? んー…だつて、家族がいなくなるのは悲しいだろ
?」

「は? …あ、うんそうだね」

「…」

「…」

「…」

「…もしかしてそれが理由?」

「やうだけど?」

「…本当に君は不思議だ。それにやつぱり面白い」
「褒めてる? それ」
「褒めてる褒めてる。…さてほんどうち、確か妹ちゃんはあの窓の

「…本当に君は不思議だ。それにやつぱり面白い」
「褒めてる? それ」
「褒めてる褒めてる。…さてほんどうち、確かに妹ちゃんはあの窓の

「ちたにいるのだよね？」
俺にいい考えがあるのだけれど、「

「はあ？　…なんか嫌な予感がするんだけれど」

「まあまあ、耳かせ？」

- 7 -

俺はアークから『いい考え』というものを聞いた。やつぱり嫌な予感はあるもんだとしみじみ思った。

「どうせこいつはあんなもんか……」

パリーンツ

間抜けだ。全力で間抜けだ。ほら、盗賊さんたちもポカーンとしているじゃないか！ 最善なのかー？ これが本当に俺達が出来る最善の方法なのかアーケーク！！！

「つていつてえ！？ 頭にガラス刺さりやがつたちくしょう！？」「てめえいきなり現れてなに勝手に切れてやがる！？」

あら、と周りを見渡しますと、各々が武器を構えています。うつわ死亡フラグ満載。さつきまでの若干のシリアス具合が俺の中から綺麗に吹っ飛んでます。なにこのふざけた状況。泣いていい？ 泣いていいのこれ？

ふと手の辺りがもぞもぞする感覚があり、そちらに手をやれば、猿轡を噛まされ後ろ手に縛られてる銀髪に蒼い目の小さな女の子があ、絶対これセフィルの妹だわ。妹も可愛いんだな、やつぱり。

「おー、てめえ何者だ？」

うわあい怖い顔。え、なんでこんなノリかって？ や、こうでもしなきや無理だつて、これ完全なる命の危機だよね？ そうだよね？ そうじやなきやなんだつて話だ。ちなみに盗賊の数はざつと一十人ほど。遠目からみたら小さな家だったけれど実際は案外広い。こういう家に住めたら楽だよなあ……いや、だから現実逃避じゃないつて、ちゃんと現実見てますつて。

「あはは……怪しいもんじゃないです、いたつて善良な一般市民な冒険者です」

「冒険者じゃねえか！」

「正直恣ガラスパリーーンはノリに近いものなんで、弁償は無理っぽいから勘弁してください。ほら？ 今時の男の子つてそういうノリが好きなんですよ。あ、厨二病的なあれとは違いますよ？ なんかこうじうのも一種の青春みたいな……あれ、違う？」

「てめえさつきからなにべらべら意味わかんねえこと喋つてやがんだ！」

「なにつて……」

「そうだよ俺、今すべきことはなんだ。そうだ、そうそつ、…どうす

ればいいんだ?

とりあえずアークの指示回想。

『とりあえずつっこめばいによー』

…うん、なんで俺従つたんだろうね。なんか覚えてないけどあれやこれやで言いくるめられた氣がする。最善だつて。だつて気がついたら窓ガラス割つたもん。あいつ口は上手い。つてかあいつはなにやるんだろう。どこにも現れないんだけど。

…まあ俺は俺の出来ることをやるべきですね。どーもシリアル空気は俺には似合わねえんだ。とりあえず真面目に、なんてやめだ。大人しくしてのもやめだ。やりたいことをやる。したいことをする。これで万事OK。妹さんの無事を確保してから、とりあえず、

むかつくながら、じこづらぶん殴る。

家族は大切ですね（後書き）

覚醒？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Rollとコンティニュー

2011年12月31日17時51分発行